

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 0 号

続・鵠沼と高瀬家の百年

再録『鵠沼に生まれて』 高瀬 三郎 ... 1

鵠沼岸防役地開墾民念碑と登場人物 ... 内藤喜嗣・渡部瞭 ... 6

万福寺について

1. 鵠沼山万福寺 浅野 陽子 ... 19

2. 民草の闘い ―日本電気硝子公害と万福寺― 渡部 瞭 ... 22

「お話」シリーズ

まとめ：企画委員会

1. 鵠沼の山岳信仰 小林 典夫さん30

2. 皇大神宮の例祭について 宮崎 誠一さん33

3. 昔の鵠沼の暮らし 関根佐一郎さん43

4. 昔の天金通り界限、街並みとエピソード ... 大出 サキさん48

鵠沼と城 夏子 鈴木三男吉 ... 54

黒崎義介画伯生涯100周年記念式典に参加して 浅野 陽子 ... 58

【松岡 喬氏追悼】形見のさくら貝 野口ゆくえ ... 61

「鵠沼を語る会」活動の記録 総務委員会 ... 62

編集後記 65

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

再録

鵠沼に生まれて

高瀬三郎（鵠沼桜が岡在住）

先に鵠沼89号で『高瀬家と鵠沼の百年』と題する特集を組みましたが、事実上高瀬弥一氏の死までの50年間しか記録することができませんでした。その後の50年間にはほとんど言及しておりません。

昨年11月、弥一氏の三男で、旧川袋高瀬邸の一角に在住される高瀬三郎氏が傘寿を記念して油絵集『来し方の眺め』（私家版）を上梓されました。

その中に、その後の50年間について極めて簡潔に無駄なくまとめられた『鵠沼に生まれて』という文章があります。

そこで、その再録は可能かうかがったところ、ご快諾を頂きました。

私の生まれ育ったところは鵠沼の川袋である。境川の遊水池であったと思われる低湿地の上の段丘に、父が大きな屋敷を大正8年頃に造った。当時の鵠沼は、一部の集落を除いてはまだ茫々の松林が多く、太い背の高い松が台地上に櫛比しており、父は自分の家の前から江ノ電に向かって道路（高瀬通り）を造り、江ノ電はその交差点の藤沢寄りに高砂^{たかさな}駅を設けた。駅名が「高砂」というように砂丘の高地であったのだろう。この道路の両側を分譲して、逗子方面の海軍の将官や、富裕な横浜方面の方々に住宅地を供給していった。この道は、江ノ電の踏切を越えて、石上の集落のあった旧片瀬街道と直角に結び、さらに、家の前から藤沢駅まで7丁に及ぶ道路を通し、地名の花立から、名称を「橘通り」とした。高瀬通りは5丁目をさらに西に延伸して、それぞれに屋敷を造られた方々の名前をとって上郎^{こうろう}通り、宮崎町、高松通り、熊倉通りなどとし、鵠沼海岸通りにまで伸ばした。

父の話では、当時の地主は頑固で、「いずれ自動車が普及する時代になるのだから、道路を造るなら両側に歩道を設け、車道も2車線を確保し、少なくとも4～5間以上の幅にしたい」と父が口を酸っぱくして説得したが協力してもらえず、やむなく妥協した結果、今のように歩道もない道がこの地域の幹線道路になってしまったとのことである。

道の両側には、500坪から1000坪級の大きな邸が建つようになり、それぞれに立派な門構えとともに邸町を形成していった。

父の邸は5000坪級で、南側の川袋の低湿地に向かって大きな池を掘り、舟を浮かべ、島までも設けた。この島々では子供達がテントを張りキャンプなどをして遊んだものである。池畔には祖母のために洒落た総檜作りの、銅板屋根や破風の美しい隠居所を建てたり、大きな石を求めて庭に配置したりと工夫を凝らした。ふんだんの植木や石燈籠、広い芝生、台地上にも造られた大きな二つの池や泉水、下の大きな池に向かう滝など、今、思い出しても、子供の頃が懐かしい。

川袋の低湿地は、その後、川名山の土砂などで埋め立てられ、長い間、すすきの生い茂る原っぱになっていた。この広大な新しい分譲地は「富士見ヶ丘」と名付けられ、地主からの強い希望もあり、父の屋敷の敷地の一部を切って、台地上の高瀬通りや橋通りとつないだ。現在、その交差点の四つ角には信号機がついているが、いすかの嘴のように不整形になっているのは、隣接するところに父が造った水道の第二水源池（地下室には大きなタンク、深井戸、それにポンプ等があった）があり、これを避けて邸寄りに坂道を開いたものと思われる。

江ノ電は、当時は所謂チンチン電車で、ポールを立てて1輦で走っていた。藤沢駅より、石上、高砂、川袋、柳小路、藤ヶ谷、鵠沼の各駅を経て、境川（下流一帯を片瀬川という）を渡り、^{あらやしき}新屋敷、^{にしかた}西方、浜須賀の各駅を経て江ノ島駅へと向かう。腰越の駅は、今よりもっと江ノ島駅寄りに位置しており、腰越の商店街の真中にあった。龍口寺前の上州屋の片瀬饅頭は、当時から片瀬の名物で、皮までもおいしく、土産には絶好のものであった。江の島駅から州鼻の商店街を通り、海岸への出口にある洗心亭、磯見亭の前から、江ノ島への栈橋があり、木製の質素な栈橋を渡って江ノ島へ行く。当時の栈橋は台風でよく流出してしまうし、島には真水が出ないので、島民は樽を天秤で肩に担ぎ栈橋を往き来していた。父がこれを見兼ねて水道を江ノ島に引いたのが、江ノ島の水道の始めであったと思う。湘南の地は、当時井戸を掘れば豊富な生活用水を得られるところが多く、水道の普及や経営は容易ではなかっただろう。

震災で残った倉や風呂場等を生かし、これに客室や玄関などを増築した家に生まれて、その家から私は小学校に通った。子供の頃は、長い廊下で分離されている離れの4部屋の子供部屋に兄たちと起居を共にした。喧嘩をして泣きながら、長い廊下を通して父母のいる母屋に行ったことを今でも思い出す。

若くして母が、そして可愛がってくれた祖母も小学校の4年生になる春3月に亡くなり、私は幼い妹達の面倒を見ながら、広大な手入れもできぬままに荒れ果てた大邸宅から小学校に通った。

その懐かしい川袋の家も、父の事業の失敗や、世の中の不景気がたたって手放さざるを得ず、私の中学3年の頃には、花沢町に父が130坪ほどの土地に家建てて移り住んだ。新居に運び込んだ川袋の邸の植木や石で庭を造ったことなどを今さらのように思い出す。

しかし、この家にも長い間は住めず、一家は江ノ電の西方附近に移り、借家住まいを余儀なくされた。高等学校の受験勉強に明け暮れた昭和17年の夏も、翌年の冬の受験もここから行くことになった。

父母が残してくれた私の兄弟姉妹は、それぞれに優秀な人達である。

長女の笑子は、横浜の県立第一高女であった平沼高女を卒業して津田塾に入ったが、予科の時に母を亡くし、中途退学して、幼い弟妹を抱えながら、東京都心の明治生命ビルにあった「国際文化振興会」に勤めた。傾いた一家を支え、弟妹達のように育った片瀬の西浜の借家住まいの時、すでに十数年経っていたが、津田塾に戻り卒業した。津田塾の先生をし、さらに東大の文学部を卒業し、ガリオア資金でアメリカの州立ミネソタ大学に学び、ここの講師から教授、のち名誉教授となり、五大湖に面する家に起居しながら、今も元気で生活している。

長兄の弥太郎は頭が良く、たいそう勉強ができた。父の元気な時でもあり、小学校の5年から県立の湘南中学に入り、水戸高等学校から東北帝大の法科に進んだ。卒業後は日本興業銀行に入り、その後徳山鉄板、オルガノ等の社長を経て、最後は山口県の防府^{ほうふ}で亡くなった。湘南中学の同級生だった梶倉氏や瀬谷氏ら、兄を知る人達は兄の頭脳明晰であったことをいまだに語り継いでいる。長兄の水戸高や東北帝大の頃は、次兄の仕送りや、父の妹の嫁ぎ先の板倉氏の仕送りなどで困ることはなく、楽しいそれなりの学生生活であったであろう。

これに引き換え、次兄の逸男は大変苦勞の多い青春時代を過ごした。次兄は勉強よりも運動が好きで、長兄とは対照的であった。少年時代はガキ大将で周囲の

人望は厚かったが、湘南中学に入ったものの途中で退学し、当時の日本橋蛸殻町^{かまから}の証券会社に奉職した。住み込みの日々の苦労は大変だったことと思う。その後満州に渡り、蘇家屯で煉瓦工場を経営するなど活躍していたが、満州で現地召集になり、工場も財産もすべてそのままに台湾に連れて行かれて終戦となり、現地で除隊、そのまま日本に戻されて来た。

西方^{にししかた}にいた父には、とても次兄の面倒を見ることはできず、私が、まだ東大の学生ではあったが千葉県^{千葉県}の船橋で自炊していたので、兄に来てもらい、共同生活をする事となった。次兄は東京の銀座の日動火災に入り、サラリーマン生活をしながら、新潟方面の戦友を頼って米を運んだりしてくれ、面倒を見るはずの私が次兄に面倒を見てもらう破目となった。

私が大学3年の時、次兄は縁あって、東京御徒町^{おかしまち}の長野商会の娘と結婚し、御徒町に小住宅と店を持ち、日動をやめて自転車部品の卸商を始めた。次兄は現在も御徒町に住み、自転車の部品卸はどうに止めて、あちこちに勤めを変えたりして今に及んでいるが、姉や私や妹達に素晴らしい人として頼られるばかりでなく、地域の方々皆に大事にされる人である。遊行寺^{ゆぎやうじ}の墓も次兄が面倒を見てくれて現在に至っている。

三男は「三郎」といい、私である。私は震災後の大正13年9月に生まれ、川袋の大邸宅で育った。兄達の本が多くあり、読書に事欠くことはなかったが、服やオモチャはすべてお古で新品などなかなか買ってもらえなかった。小学校の高学年の頃には、一家はひどい経済状態に陥り、仏壇までも差し押さえられたほどだった。小学校を卒業しても中学に行かせてもらえず、高等小学校に半年入ったが、父が可愛がっていたかつての出入りの植木屋が見兼ねて、鵠沼新田^{しんでん}の裕福な方の家に紹介してくださり、その家の書生になって1年遅れで湘南中学に入った。

私は元来蒲柳の質で体が弱く頭脳はほどほどと思うが、気力や集中力や瞬発力が優れていたのか成績もほどほどで、書生になった家の主人が肺病になって、経済的にも無理となった中学3年の夏に川袋の廃屋に戻り、さらには住居を転々として片瀬の西方の借家で辛うじて中学を卒業した。必死で受験勉強をして新潟高等学校に入り、学級総代にはなったものの、学費を父から送付してもらえず、寮にも長い間は入れず、住み込みの家庭教師をしながら何とか高等学校を卒業した。やがて戦争がひどくなり、勤労働員で不二越の東岩瀬工場の電気炉での特殊鋼の生産に従事した。

昭和20年の春には東大の建築に入学したが、熾烈な戦争に続いて敗戦となり、

その後のひどい食糧難などでほとんど勉強らしい勉強もしないまま、昭和23年の春、大学を卒業した。こうして学力や技術の能力は月足らずのまま、建設本省に入った。長い役人生活を終えて、現在鵠沼の小住宅に暮らし、庭仕事や油絵を画くなどしている毎日である。

私の下の子は2人いるが、上の妹は八重子といい、才媛で、湘南白百合高女では有名な秀才であったし、その後津田塾の理科に進んだ。兄の友人の瀬谷氏の懇望もだし難く、腰越の瀬谷邸に嫁として迎えられた。

不幸にして瀬谷氏は一家が離散し、妹は離婚して後、調布や早稲田に住んだが、その後良縁を得て、国分寺の家に住むこととなった。再婚した吉川氏も亡くなり、当人は今も健康で国分寺に起居している。

一番下の妹は由美子というが、湘南白百合を出てから、玉川学園に行った。思うところあって、横浜の聖母の園の修道女となり、沖縄、熊本、宇都宮を経て、横浜の保育園の園長を長期間務め、今、北海道の札幌近郊の修道院にいる。非常に性格がよく、皆に慕われ、大事にされており、何にもまして私は嬉しい。

皆それぞれユニークな人生航路を辿ってきているが、それぞれに優れていて、気持ちのいい人達であることを私は誇りに思う。

父も晩年こそ気の毒の一語に尽きるが、実に個性豊かな人生を送ったと思う。立派だった祖父が貿易商として巨万の富を得て、鵠沼の藤ヶ谷に2万坪にも及ぶ豪壮な邸宅を構え、長男の父と5人の娘を育てた。妹達は父の東大時代の友人がそれぞれ嫁にした。祖父の死後、その邸を売って鵠沼の川袋に邸を造った父は、道路を50丁余開き、隣接する宅地を開発し、水道を引き、鵠沼はおろか江ノ島にも鎌倉にも水を供給するなど、その活躍はめざましいものがあつた。藤沢の昔の町会議員や昔の藤沢中学の先生などをしていた父が懐かしい。祖母や母が亡くなってからの父は、随分と寂しい日々を過ごしたであろう。不況や資金難から困窮していった父があわれでならない。せめて、私達はいつまでも元気でいきいきと生きたいと思う。

たかせ さぶろう

かなり忠実に原文のまま掲載してあります。

編集者として疑問に感じた通称と違う地名については、高瀬三郎氏の許可を得て変更させていただきました。ルビは編集者が加えました。

なお、由美子さんは、最近札幌から種子島に移られたそうです。

鵠沼海岸別荘地開発記念碑と登場人物

内藤喜嗣・渡部 瞭（会員）



はじめに

江ノ電鵠沼駅前の賀来神社境内中央に、巨大な石碑が建っている。

『鵠沼海岸別荘地開発記念碑』とあり、鵠沼海岸別荘地の開発の経緯を知る上で、極めて重要な手がかりを与えてくれる。これまでも、藤沢市史(第6巻)をはじめ、何人かの人々が解説を加えている。碑文は漢文で、若干解説が面倒だが、さほど難解な文章ではない。彫りもしっかりしており、今のところ欠落の恐れはない。市史では全文は紹介されておらず、他の2例についても若干の読み落としがある。今回、改めて読みの正確を期

した。当碑は「開発記念碑」とあるが、むしろ、鵠沼海岸別荘地の開発の功労者、伊東将行の彰徳碑として企画されたことが、次段中段の大正9年3月25日付け『横浜貿易新報』記事からも読みとれる。ところが、その途中に将行は死去した(下段記事参照)。

伊東将行の何たるかは、かなり謎に包まれている。その出自について、この碑では武州(埼玉県)川越の人とあるのみで、それ以上のことは読みとれない。最後の孫に当たる右近氏によれば、信州出身の士族で、上野の彰義隊で生き残り、川越に隠遁したのだということが右近家には伝えられているという。これは、右近家の祖先と混同している可能性もある。信州の士族といっても、信州には6万石の松本藩から1万石の須坂藩まで、11もの藩があったわけで、漠然としている。ここでは伊東将行の人となりを記す目的ではないので、別の機会に譲りたい。

本稿では、碑文に記された人物について、できるかぎり調査した結果を述べる
こととする。碑面には合計30名に及ぶ人物が登場する。藤沢市史では「職業不明
者6名省略」とあるが、今回極力詳細に調査して、その穴を埋める努力を試みた。
他に裏面には発起人として9名が連名しており、別碑『建碑賛助者』には50名が
名を連ねるが、むしろこちら側に不明なものが多い。

SHIMPO (日曜日) 日六十月一十年八正大

横濱貿易新報

本紙は、横濱貿易新報社が発行する、横濱の経済、社会、文化に関する新聞である。

藤澤の表彰式
功勞者六名
○式後盛大なる同遊會
藤澤町役場禮堂に於て十五日午前
九時より同町功勞者表彰會、功勞
助町會議員加藤、山崎、山崎、山
吉五郎、白井正五郎、山崎仙太郎
諸氏の表式式を行へり。定款金三
長の開會の辭に次て紀念の銀三
組を贈呈し、村山、高橋、高橋、
澤小、校長有志、代平、野友、諸
の祝辭、能く志を述べ、加藤、山
門氏の答辭ありて式を終り、夫より
更に同地、會社、工場を有する、
及び、功勞者、伊東、特、氏、の
持命、を、使、大なる、同遊會を、
し、散會せり。参加者二百餘名也。

SHIMPO (日曜日) 日五十二月三年九正大

**沼開拓者の
彰徳碑建設**
藤澤町役場伊東特氏、同所無
が三十餘年前までは、荒れたる、
なりしを、早くも、之れが、開拓に、
し、松岡を、植、込、み、防、堤、を、築、く、
と、千、辛、苦、したる、中、に、ありて、現、今
にては、沼、原、に、冠、たる、開、拓、地、と、な、
地、價、の、如、き、當、時、一、反、歩、僅、に、一、兩、
外、なりしが、昨、今、にては、一、兩、二、七、
八、兩、を、呼、ぶ、に、至、り、し、は、金、く、氏、の、
力、に、依、る、を、以、て、昨、秋、功、勞、者、と、し、
表、彰、せ、れ、が、今、同、地、開、拓、者、金、子、
角、之、助、町、會、議員、加、藤、山、崎、門、
諸、氏、五、郎、山、崎、長、平、山、崎、長、
高、橋、良、夫、山、崎、良、夫、山、崎、良、
者、長、谷、川、欣、一、郎、諸、氏、金、に、て、
碑、を、建、設、する、に、決、し、目、下、奔、走、中、
なりと云。

KI SHIMPO (日曜日) 日一十三月七年九正大

る、去、る、廿、九、日、午、後、一、時、
に、て、逝、け、り、葬、儀、は、卅、一、日、午、
時、尼、寺、に、於、て、執、行、する、筈、なり

十年、前、伊、東、特、氏、移、住、し、同、地、の
開、拓、に、努、力、したる、開、拓、者、に、冠、
たる、開、拓、地、と、な、り、し、は、金、く、氏、の、
力、に、依、る、を、以、て、昨、秋、功、勞、者、と、し、
表、彰、せ、れ、が、今、同、地、開、拓、者、金、子、
角、之、助、町、會、議員、加、藤、山、崎、門、
諸、氏、五、郎、山、崎、長、平、山、崎、長、
高、橋、良、夫、山、崎、良、夫、山、崎、良、
者、長、谷、川、欣、一、郎、諸、氏、金、に、て、
碑、を、建、設、する、に、決、し、目、下、奔、走、中、
なりと云。



開拓者近
藤澤町役場伊東特氏、同所無
が三十餘年前までは、荒れたる、
なりしを、早くも、之れが、開拓に、
し、松岡を、植、込、み、防、堤、を、築、く、
と、千、辛、苦、したる、中、に、ありて、現、今
にては、沼、原、に、冠、たる、開、拓、地、と、な、
地、價、の、如、き、當、時、一、反、歩、僅、に、一、兩、
外、なりしが、昨、今、にては、一、兩、二、七、
八、兩、を、呼、ぶ、に、至、り、し、は、金、く、氏、の、
力、に、依、る、を、以、て、昨、秋、功、勞、者、と、し、
表、彰、せ、れ、が、今、同、地、開、拓、者、金、子、
角、之、助、町、會、議員、加、藤、山、崎、門、
諸、氏、五、郎、山、崎、長、平、山、崎、長、
高、橋、良、夫、山、崎、良、夫、山、崎、良、
者、長、谷、川、欣、一、郎、諸、氏、金、に、て、
碑、を、建、設、する、に、決、し、目、下、奔、走、中、
なりと云。

1919(大正8)年11月16日/1920(大正9)年3月25日/7月31日の横浜貿易新報記事

鵠沼 海岸 別荘 地開 賛記 念碑

湘南海岸一帯之地往昔稱砥上原鵠沼在其東南隅左爲片瀨右爲辻堂南則積水涵天浩蕩無涯伊豆大島三浦半島隱見其間西則芙蓉峰高巖立于天際箱根足柄雨降之諸山環列其左右明治十九年武州川越之人伊東將行偶來于此地徘徊移刻俯仰四顧以爲郊外生活之好適地也遂移住與三背直吉協力創設鵠沼館以供士女游涉之便翌二十年今福元穎三背八郎右衛門金子小左衛門田中平八齋藤六左衛門等相謀建設武相俱樂部將行亦爲部員專講游客招致之策而共未到舉其績將行敢不屈二十二年與中野武營中島行孝伊藤幹一從事于海岸之開發開道路種松樹以便作屋宇與園庭於是乎往昔汀沙漠々風塵拂面之域今變爲一望曠觀風光明媚之佳境貴紳富豪之構別邸設別墅者年々增加其數如蜂須賀茂承益田孝藤堂高紹久松定謨馬越恭平高瀬三郎鄉誠之助廣岡助五郎山口寅之輔佐藤長四郎吉田嘉助宮崎寬愛千葉恒次郎小田柿捨次郎田中銀之助爲其重者將行益奮勵二十五年更營一旅館曰東家既營而築之既築而擴之樓觀精工巨麗不靡環館皆松造池蓄水清洒可掬前面隔渚臨江島呼欲磨其富海山眺望之勝如此館不多見其比況室清魚美歡待至切宜矣伴此地之發展日極其繁盛寺尾亨數來遊于此地頗詳其蒼桑改觀之狀每語人曰鵠沼之有今日蓋亦將行積日累勞之所致其功豈可殁乎信其然矣將行今年七月二十九日病歿享年七十有五孫將治繼其家族長谷川欽一承其業施設渾如故此地有志嘉尚其功胥諮欲樹碑記念此地之開發兼傳之不朽索記余余深讚此舉依錄其概且係以銘

鵠沼之濱開發維新翠嵐遠望碧波近接宜冬宜夏可宅可游湘南多勝勝中之勝

大正九年庚申十二月

頭山 滿題字

牧野隨吉撰又書

※なるべく碑の原文に沿えるよう、行数と一行の文字数は碑文のままにしてある。字体もなるべく忠実に再現したつもりだが、パソコンの書体がない文字は仕方なかった。鷹は楷書フォントにないので明朝とした。欲待の欲は、碑文では別字（偏はヒの下に矢、旁は欠）を用いてあるが、本字とした。なお、八行目最下文字の「承」は「韶」の可能性もある。また、最終行の「嵐」は「巒」でないと意味が通じにくい。（渡部）

龜沼海岸功狂地開發記念碑

読み下し文（旧仮名遣い、旧漢字を使用）

湘南海岸一帯ノ地ハ往昔砥上原ト稱シ、鵠沼ハ其ノ東南隅ニ在リ、左ハ片瀬ヲ爲シ右ハ辻堂ヲ爲ス、南スレバ則チ積水天ヲ涵シ浩蕩涯無ク、伊豆大島三浦半島其ノ間ニ隱見ス、西スレバ則チ芙蓉峰高ク天際ニ巖立シ、箱根足柄雨降ノ諸山其ノ左右ニ環列ス、明治十九年武州川越ノ人伊東將行偶此ノ地ニ來リ、徘徊移刻、俯仰四顧シテオモヘラク郊外生活ノ好適地ナリト、遂ニ住ヲ移ス、三賢直吉ト協力シテ鵠沼館ヲ創設シ、以テ士女游渉ノ便ニ供セリ、翌二十年、今福元穎・三賢八郎右衛門・金子小左衛門・田中平八・齋藤六左衛門等ト相謀リ武相俱樂部ヲ建設セリ、將行亦部員ト爲リ、専ラ游客招致ノ策ヲ講ジテ、共ニ未ダ其ノ績ヲ擧グルニ到ラズ、將行敢テ屈セズ、二十二年中野武營・中島行幸・伊藤幹一ト海岸ノ開發ニ從事セリ、道路ヲ闢キ松樹ヲ種エ、以テ屋宇ト園庭ヲ作ルニ便ニス、是ニ於テカ、往昔、汀沙漠々トシテ風塵面ヲ拂フノ域、今變リテ一望曠觀、風光明媚ノ佳境トナリ、貴紳富豪ノ別邸ヲ構エ、別墅ヲ設クル者、年々其ノ數ヲ増加セリ、蜂須賀茂承・益田孝・藤堂高紹・久松定謨・馬越恭平・高瀬三郎・郷誠之助・廣岡助五郎・山口寅之輔・佐藤長四郎・吉田嘉助・宮崎寛愛・千葉恒次郎・小田柿捨次郎・田中銀之助ノ如キハ其ノ重ナル者ト爲ス、將行益奮勵シ、二十五年更ニ一旅館ヲ營ミ東家ト曰フ、營ミテ之ヲ築キ、築キテ之ヲ擴グ、樓觀ハ精工巨麗ニシテ摩ラズ、館皆松ヲ環ラシ、池ヲ造リ水ヲ蓄エ、清酒掬ス可シ、前面渚ヲ隔テテ江ノ島ニ臨ム、呼ビテ其ノ富ヲ膺カント欲ス、海山眺望ノ勝、此ノ館ノ如キハ多ク其ノ比ヲ見ズ、況ンヤ室清ク、魚美ク、欲待至切ニ宜シ、此ノ地ノ發展ニ伴ヒ、其ノ繁盛日ニ極マル、寺尾亭數此ノ地ニ來遊シテ、頗ル其ノ蒼桑改觀ノ狀ヲ詳カニス、毎二人ニ語リテ曰ク、鵠沼ノ今日有ルハ蓋シ亦將行ノ積日累勞ノ致ス所其ノ功豈ニ殫ス可ケンヤト、信ニ其ノ矣フヤ然リ、將行今年七月二十九日病歿セリ、享年七十有五、孫將治其ノ家ヲ繼ギ、族長谷川欽一其ノ業ヲ承グ、施設渾テ故ノ如シ、此ノ地ノ有志、其ノ功ヲ嘉尚シ、胥ニ語リテ碑ヲ樹テ、此ノ地ノ開發ヲ記念シ、兼テ之ヲ不朽ニ傳ヘント欲ス、記ヲ余ニ索ム、余深ク此ノ舉ヲ讚ム、依ツテ其ノ概ヲ錄シ且ツ係ワルニ銘ヲ以テス

鵠沼ノ濱ノ開發ハ維新ナリ、翠巒遠望シ碧波近接ス、冬宜シク夏宜シ、宅ス可ク游ブ可シ、湘南ニ勝多ケレド勝中ノ勝ナリ

大正九年庚申十二月

頭山 満題字

牧野隨吉撰又書

金子角之助
長谷川多嘉
萩原輝
加藤徳右工門
高松良夫
右近辰太郎
福田良平
齋藤正五郎
關根芳五郎

建碑贊助者

電 ○	建 具	庭 師	家 ○	薦 職	大 工	○	魚 商	薦 職	石 工
業	職	師	職	職	職	○	職	職	事
田 口	高 木	高 梨	高 倉	金 井	石 田	金 井	和 田	小 田	池 田
○	可	藤	今	条	安	米	岩	千	格
○	三	太	歲	吉	五	義	吉	茂	三
		郎			郎				郎

土石工木 ○ 左官職 ○ 植木職 ○ 鳶木職 經土職
 閔石田 ○ 三輪又次郎 北村經太郎 沢村經太郎 有田良助 小林哲五郎 小林哲吉
 根信次郎

A. 記念碑表面に登場する人々(碑文順)

【鵠沼海岸別荘地開発功労者】

A 1. 伊 東 將 行 (1861-1920. 7. 29) 埼玉県川越市より転入

鵠沼海岸別荘地開発功労者。鵠沼館・東屋経営。大給子爵家の土地開発
・分譲で鵠沼南東部紹介の先駆けをした。

【鵠沼館創設者】

A 2. 三 鶯 直 吉 生没不明 出身：羽鳥村(?)

鵠沼館を将行と協力して創設したことしか判明していない。

【武相俱樂部建設メンバー】

A 3. 今 福 元 穎 生没不明 出身：中新田村(海老名市)

第2代高座郡長、神奈川県会議員、国会開設運動に熱心に取り組んだ。

A 4. 三鶯八郎右衛門 生没不明 出身：羽鳥村

旧羽鳥村名主、羽鳥村初代村長。明治5年鵠沼村戸長を務める。

A 5. 金 子 小左衛門 生没不明 出身：大庭村

旧大庭村名主、大庭村村長、藤沢町会議員、神奈川県会議員(自由党)
2代目藤沢町長金子角之助の養父

A 6. 田 中 平 八 生没不明 住所：東京麹町区内幸町1

本名：北村菊次郎。相場師=田中平八(天下の糸平)の長女=登羅の婿で
三代目平八を継ぐ。糸平不動産・田中鉾山を興す。

A 7. 齋 藤 六左衛門 生没不明 出身：鵠沼村荻田

旧鵠沼村名主(大齋藤)、鵠沼村会議員・藤沢町会議員、鵠沼新場(生糸
市場・地引き網)の取締役、大地主。

【鵠沼海岸別荘地開発関係者】

A 8. 中 野 武 營 (1848. 1. 3-1918) 出身：香川県 本郷元町1-5住

香川県官吏→農商務省書記官→東京株式取引所副頭取、東京市会議員、
衆議院議員。小田原電気鉄道社長、東京商工会議所会頭

A 9. 中 島 行 孝 (1934. 8. 21-?) 出身：東京 牛込区南山伏町2

東京株式取引所理事長、農工貯蓄銀行頭取。東京市議(議長)・東京府議
衆議院議員など

A10. 伊 藤 幹 一 (1844. 11-) 出身：東京 住所：麹町区下二番町

旧幕臣=伊藤幸之助の長男。戊申戦役従軍。教育界→欧米の取引所研究
東京株式取引所書記長→支配人→常務理事。東京市議(小石川区)

【別荘地を購入した貴紳富豪】

- A11. 蜂須賀^{もち}茂韶^{つぐ}(承?) (1848. 8. 8-1918) 出身：徳島市
侯爵。旧阿波徳島藩主斉祐卿の男。東京府知事、文部大臣、貴族院議員
- A12. 益田 孝 (1847. 11. 17-1938. 12. 28) 出身：佐渡 住所：北品川宿
男爵・勲三等。井上馨の千収会社→三井物産→三井合名を組織。三井財
閥最高経営者・財界の重鎮^{どんのう}。鈍翁と号し、茶人・古美術収集でも著名。
小田原が別邸で鵠沼別荘は愛妾邸。次男=信世氏が跡を預かる
- A13. 藤堂 高紹^{つぐ} (1884. 7. 27-) 出身：三重県津市 住所：本所横網
伯爵。旧津藩主=藤堂高潔の長男。学習院卒後ケンブリッジ大に留学、
外務省政務局→通訳・式部官。伊日辞典(鳳鳴堂)刊行。娘=千賀子は朝
香宮妃。在英時代の友人=田中銀之助より赤別荘の地を分譲された
- A14. 久松 定護^{さだ こと} (1867. 9. 9-1943) 出身：愛媛県松山市
伯爵。静岡藩士族=松平勝氏の次男。伊豫松山藩主=久松定昭卿の跡を嗣
ぐ。1884年仏国に留学、帰国後陸軍に入隊、歩兵大佐→中将
- A15. 馬越^{まごし} 恭平 (1844. 10-1933) 出身：岡山県 住所：芝桜川13
家代々医を業とするが、商を目指し大阪の巨商=鴻池から井上馨の千収
会社にて益田孝と苦楽を共にする。三井物産、三井呉服店理事を経て日
本・札幌・大阪合同成立の大日本麦酒^{アサヒ}社長。商工会議所初期より10期
理事。衆議院議員
- A16. 高瀬 三郎 (1859-1916) 出身：鎌倉十二所 横浜より移住
旧十二所村名主=山口義高の次男として生まれ、1883年高瀬家を嗣ぐ。
横浜貿易・高瀬商店設立、一代で財を成す。破産時中藤ヶ谷に2万坪余
の土地を長男=彌一名義で購入、豪邸を構え、再起を期す[鵠沼89号]
- A17. 郷 誠之助 (1865. 1. 8-1942. 1. 12) 出身：東京 住所：麴町上二番町
男爵。岐阜出身の正二位勲一等=男爵=郷純造の次男。1884年独国に留学、
経済学を学ぶ。哲学の博士号を得て帰国。農商務省の嘱託を経て実業界
入り。東京株式取引所理事長、帝國商工銀行頭取、商工会議所会頭。貴
族院議員
- A18. 廣岡 助五郎 (1882. 10. 31-?) 出身：東京 住所：京橋区四日市2-3
都下屈指の清酒問屋[加島屋]先代助五郎の長男。1888. 1家督相続。商売
を拡大させ、加島屋貯蓄銀行取締役を兼任するも後辞任。鵠沼に隠居し、
鵠沼郵便局 2代目局長・自警団顧問

A19. 山 口 寛之輔 生没不明 出身：鎌倉十二所
高瀬三郎の甥(弟とも)。山口高重(喜左衛門)の子=高久。不動産業。後
に松島苑住宅地を開発[鵠沼89号]

A20. 佐 藤 長四郎 生没不明 住所：麴町区
代々薬種問屋の家に生まれる。

A21. 吉 田 嘉 助 (1890. 4. 28-?) 出身：東京 住所：京橋区元数寄屋2-4
紙商=吉田嘉平の次男。開発初期に海岸商店街の一角を先代が入手

A22. 宮 崎 ^{ひろ}寛 ^{ちか}愛 生没・出身不明
北海道開拓史にその名を留める。大正初期に川袋(宮崎町)に広大な屋敷
を構える。昭和10年代初め旧満州に渡り、屋敷は以後安齊氏に売却。
[鵠沼86号]墓所：遊行寺

A23. 千 葉 恒次郎 生没不明 出身：東京 住所：麻布区新龍土町
千葉忠三郎の次男。長兄=清(肥料部)と三井物産に入り、石油部門の取
締役。兄弟で鵠沼に別荘を持ち、後に常住

A24. 小田柿 捨次郎 (1865. 11. 6-?) 出身：滋賀県 住所：芝高輪南30
小田垣彦内の三男。東京高等商業学校卒。三井物産海外部の取締役。上
海・香港など中国、米国(桑港)、朝鮮などの支店長を歴任

A25. 田 中 銀之助 (1873. 1. 20-1935) 出身：東京 住所：麻布区市兵衛町
3代目田中平八(A 6)の長男、糸平の孫。慶應義塾→ケンブリッジ大卒、
藤堂高紹(A13)と親交。日本にラグビーを導入。田中銀行・田中鉱業・
日本製鋼所各取締役。鵠沼の別荘は「赤別荘」と呼ばれた。

【来遊し、伊東将行を世に紹介した】

A26. 寺 尾 ^{とおる}亨 (1859. 2. 1-1925. 9. 15) 住所：赤坂
国際法学者。東京天文台の初代台長=寺尾寿の弟。頭山満(A29)の隣人

【後継者】

A27. 伊 東 将 治 (?-1998) 出身：鵠沼
伊東将行の一人娘=政子の婿=右近辰太郎の次男。将行の養子となる。
1950年、鵠沼ホテル跡に割烹料亭「東家」を開く。1995. 12. 31廃業

A28. 長谷川 欽 一 (1900. 9-1985. 6. 24) 出身：東京 住所：鵠沼村6642
東屋初代女将=長谷川榮の弟=長谷川繁蔵の長男。父の死により1902年数
え3歳で長谷川家の家督を継ぎ、名目上東屋の経営者となる。2代目女
将=多嘉(B 2)の死後実質的に東屋を経営するが1939年9月廃業

【鵠沼海岸別荘地開発碑記載者】

- A29. 頭^{とう}山^{やま} 満 (1855. 4. 12-1944. 10. 5) 出身：福岡県 住所：赤坂
大亜細亜主義の立場で運動を行った国家主義運動家。政治結社《玄洋社》
を創設、日本亡命中の孫文・ボースらを庇護した。
- A30. 牧 野 随 吉 生没不明 出身：高座郡綾瀬村
自由民権運動家。《真友会》会員。書家。著書に『震災余録』がある

B. 記念碑裏面に連名する発起人(町長外イロハ順)

- B 1. 金子角之助 (1866. 12. 25-) 出身：綾瀬村蓼川
蓼川の武藤家の三男。耕余塾卒業後教職につき、自由民権運動に参加。
金子正左衛門(A 5)の養子となる。町会議員を経て2代目藤沢町長4期
- B 2. 長谷川^{たか}多^か嘉 (1866. 10. 13-1958. 9. 7) 出身：牛込区
東屋2代目女将。初代=榮の姉。画家=長谷川路可の母。墓所：本眞寺
- B 3. 萩 原 輝 生没・出身不明
長谷川欽一の後見人
- B 4. 加藤徳右工門 (1875. 9. 8-?) 出身・住所：鵠沼村引地
引地の酒・醤油醸造業、黄金飴製造に成功し飴専業となる。一代前より
鵠沼の宅地開発を手がけ、藤沢町会議員。後に『現代の藤澤』を編著
- B 5. 高 松 良 夫 (1864. 6. 21-?) 出身・住所：鵠沼村仲東
鵠沼きつての旧家。高座郡会議員を経て藤沢町初代町長。建碑時は町会
議員。墓所：鵠沼墓地
- B 6. 右 近 辰 太 郎 生没不明 出身：東京日本橋
伊東将行(A 1)の一人娘=政子の婿。伊東将治(A27)の実父で後見人
- B 7. 福 田 良 平 (1877. 8-?) 出身：埼玉県吹上 東屋の隣で開業
伊東将行が呼び寄せた医師。東屋の隣に《鵠沼海浜病院》を開設、医院
長。東屋の女将=多嘉(B 2)の妹=長谷川蝶と結婚。藤沢町会議員。後に
藤沢の乗合自動車会社を統合した《藤沢自動車(株)》の社長
- B 8. 齋 藤 正 五 郎 生没不明 出身・住所：鵠沼村荻田
齋藤六左衛門(A 7)の長男。藤沢町会議員2期、学務委員を務める
- B 9. 關 根 芳 五 郎 生没不明 出身・住所：鵠沼村
鵠沼の《安場》を経営。藤沢の土建業の元締め大親分

C. 別碑『建碑賛助者』に記された人々（イロハ順）

C 1. 伊藤 幹一 (A10)参照

C 2. 伊藤 清 生没不明 出身：東京府 住所：日本橋区茅場町

茅場町の呉服商。岸上由蔵(C40)の隣に居住

C 3. 岩田 正道 生没・出身不明 医師？ 詳細不明

C 4. 岩垂 邦彦 (1857. 8. 15-?) 出身：福岡県 住所：芝区三田1-4

士族=喜田村脩蔵の次男に生まれ、1864年先代=岩垂茂七の養子となる。

理科大卒。電気事業の可能性を研究し同士と工場設立。日本電気(株)専務

C 5. 長谷川 欽一 (A28)参照

C 6. 藤堂 高紹 (A13)参照

C 7. 千葉 恒次郎 (A23)参照 ※碑に恒三郎とあるは誤りか？

C 8. 千葉 清 (1878. 8. 22-?) 出身：東京府 住所：麻布区新龍土町12

千葉忠三郎の長男、恒次郎(A23)の兄。東京高等商業学校(一橋)卒。

三井物産の綿布部を経て肥料部。推進取締役

C 9. 岡田 福壽 生没不明 出身：東京 住所：浅草須賀町 他詳細不明

C10. 小澤 ヒサ 生没不明 出身・住所：横浜市野毛1丁目 他詳細不明

C11. 加藤 為二郎 生没不明 出身・住所：神田区中猿樂町 石炭商

C12. 川元 姉妹 生没不明 出身：東京府 鵜沼常住。貸別荘「川元別荘」所有

C13. 梶 川 儀隆 生没・出身不明 その他も詳細不明

C14. 各務^{かがみ} 幸一郎 (1861. 10. 24-?) 出身：東京府 住所：麹町区富士見2丁目

各務省三の長男。日本郵船(株)経理取締役。書生に後の歌人=山口茂吉

C15. 金杉 英五郎 (1865. 7. 13-1942. 1. 26) 出身：千葉県 住所：神田駿河台

金杉與右衛門の三男、姻戚恒の養子に。ドイツ留学、医学博士。

耳鼻咽喉科金杉医院設立。慈恵医大設立に尽力。建碑当時衆議院議員

C16. 横井 忠吉 (1883. 2-?) 出身：大分県 住所：牛込区矢来町3

横井忠直の長男。能楽シテ方、宝生流家元=宝生九郎。鵜沼は愛妾別荘。

次男はバレエ振り付け師=横井 茂

C17. 高濱 源蔵 生没・出身不明 その他も詳細不明

C18. 高瀬 彌一 (1887. 7. 28-1954. 10. 5) 出身：横浜市 住所：建碑時は川袋

高瀬三郎(A16)の長男。不動産業。後に藤沢町議2期。詳細は[鵜沼89号]

C19. 田中 常德 (1860. 1. 8-?) 出身：東京府 住所：麹町区中六番町

日本郵船を経て麒麟麦酒・帝国劇場・日本共同製茶各取締役

- C20. 田 中 安** (1851. 12-?) 出身：東京市 住所：四谷区北伊賀町4丁目
田中倉吉の長男。鵠沼別荘前の対江館(待潮館)を購入、中屋旅館として営業。土地を広く購入して貸店舗・貸別荘・貸家を手広く経営。後に石油元売り田安商事(株)を創業。長男=耕太郎。次男=上村元嗣→安一郎(鵠生園)
- C21. 玉置孝兵衛** 生没不明 出身：東京府 住所：日本橋区堀江町4丁目
砂糖商
- C22. 佃 一 豫** 生没不明 出身：東京府豊多摩郡 住所：原宿
日本興業銀行副総裁・南満州鉄道総裁
- C23. 辻 一 郎** 生没不明 出身：東京府 住所：麻布区東町 会社役員
- C24. 内 藤 彦 一** (1865. 7. 6-1933. 11. 17) 出身：山梨県 住所：京橋区尾張町
内藤朝政の長男。米国で商業・経済学を学び、メーシー百貨店(ニューヨーク)で研鑽。鶴や呉服店(横浜)に入り、東京に進出、松屋呉服店→松屋百貨店。支配人→専務。商工会議所理事。銀座菊水煙草店店主。玄洋社建碑当時、米国から輸入した日本最古の組立家屋を建築[鵠沼79号]
- C25. 中 丸 一 平** (1870. 4. 25-?) 出身：東京市
山口藩士=中丸照一の長男。法科大学卒、三井物産門司支店長→本社営業部長→取締役
- C26. 名塚源太郎** 生没・出身不明 その他も詳細不明
- C27. 山田松三郎** 生没不明 出身：岡山県 住所：芝高輪南町
製糸合名会社代表社員
- C28. 松 本 直 祐** (1858. 6. 4-?) 出身：東京市 住所：日本橋区通油町
平井庄次郎の長男。松本家を嗣ぐ。木綿布織販売業。鵠沼では貸別荘=《松本陽松園》(建碑当時画家=岸田劉生も住む)を経営[鵠沼86号]
- C29. 馬 越 恭 平** (A15)参照
- C30. 益 田 信 世** 生没不明 出身・住所：京橋区築地明石町
益田 孝(A12)の次男。三井物産社員。鵠沼の別荘を引き継ぐ(A12)参照
- C31. 深江基太郎** 生没・出身不明 その他も詳細不明
- C32. 後 藤 武 夫** (1870. 8. 18-1933. 2. 25) 出身：福岡県 住所：京橋区木挽町
久留米藩士=後藤増蔵の長男。英吉利法律学校(中央大学)→第五高等学校中退。同志社に学び全国演説旅行。福岡新聞記者を経て上京、帝国興信所(帝国データバンク)を興す。鵠沼には賢夫人=タマが常住

C33. 郷 誠之助 (A17)参照

C34. 小 城 ウ タ 生没不明 出身・住所：芝公園20 西洋料理店経営

C35. 青 山 祿 郎 生没・出身不明

安中電気製作所社長。ダットサンのAの字は彼の姓から

C36. 坂 田 重 雄 生没・出身不明 その他も詳細不明

C37. 木 下 利 吉 (1882. 2. 12-?) 出身：東京府 住所：神田区通新石町

代々岡山池田藩抱えの宮大工。江戸に出て維新後宮内省の出入り。鵠沼には叔父=米三郎(C39)が関わった縁で母親=千賀子(定住)が広大な土地を購入、貸別荘を営む。賀来神社石囲いの支柱献納者

C38. 木下米三郎 (1858-?) 出身：東京市 住所：下谷区池之端七軒町

先代利吉の弟(分家)。鵠沼の初期開発を手がけた。神職の資格を持ち、賀来神社の遷座を行った。賀来神社石囲い献納者

C39. 菊本直次郎 (1870. 9. 12-1957) 出身：三重県 住所：南青山

津藩主=藤堂家家臣=菊本保有の次男。慶應義塾卒。三井銀行常務取締役→初代会長[鵠沼87号]

C40. 岸 上 由 藏 生没不明 出身：東京市 住所：日本橋区南茅場町

茅場町の商人。伊藤幹一と親交、海岸に広大な土地を購入。別荘なし

C41. 三 觔 舜 太 郎 生没不明 出身：羽鳥村

三觔八郎右衛門(A 4)の長男。本家当主。第2期藤沢町会議員→学務委員

C42. 柴 丑之助 生没・出身不明 その他も詳細不明

C43. 柴垣^{かね}鼎太郎 生没・出身不明

文部大臣官房建設課長。千葉大医学部本館など、多くの名建築物を設計

C44. 慈 教 庵 所在地：鵠沼字下鰯細川邸内

浄土宗寺院。開山=颯田本眞尼。震災で倒壊後、移転して本眞寺となる
伊東将行の葬儀が行われ、本眞寺に墓碑も建つが、日蓮宗で墓所は別

C45. 廣岡助五郎 (A18)参照

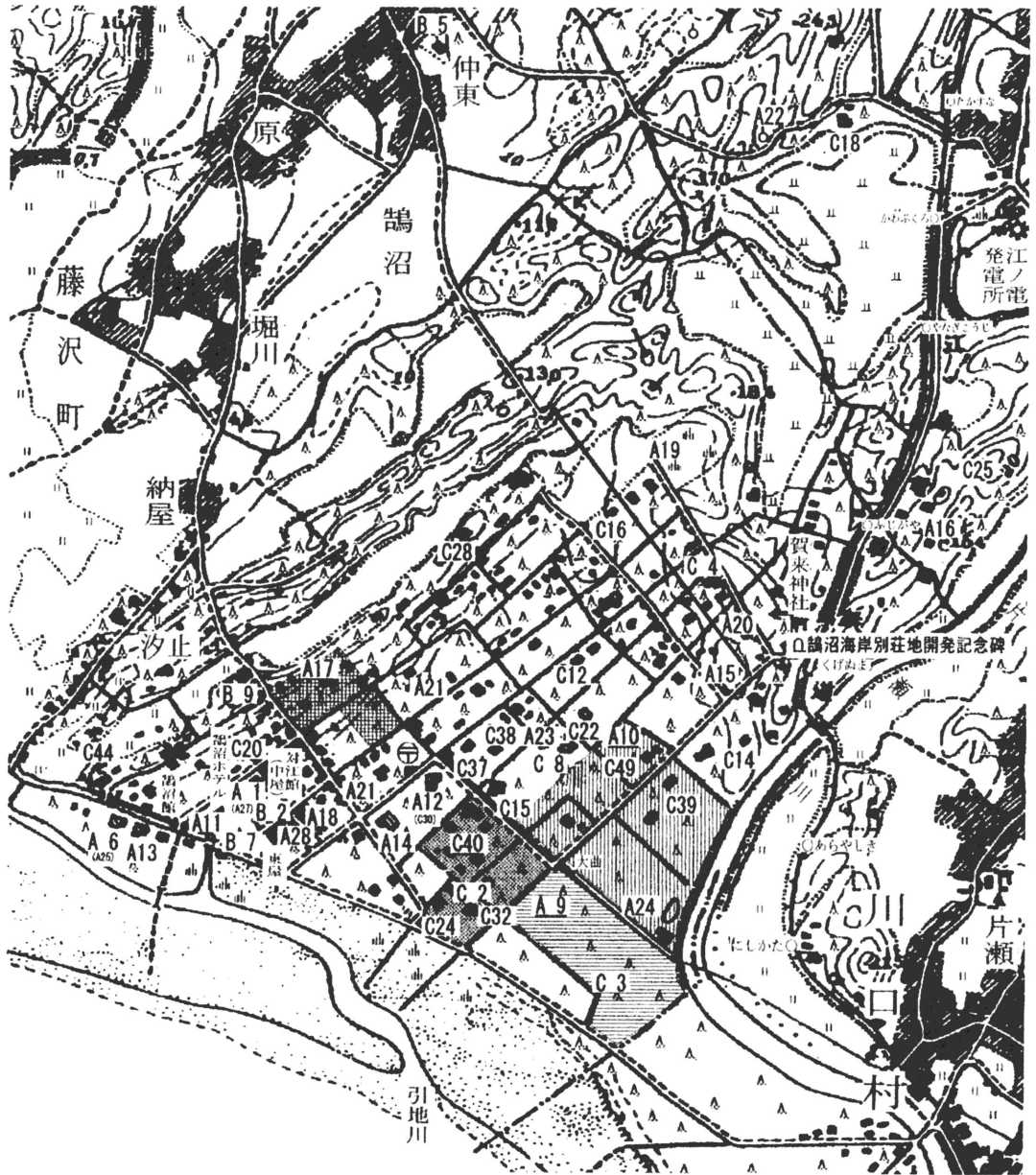
C46. 平 井 重 美 生没・出身不明 その他も詳細不明

C47. 平山儀三郎 生没不明 出身：東京府 住所：京橋区本材木町 売薬業

C48. 久 松 定 謨 (A14)参照

C49. 最 上 廣 胖 生没不明 出身：東京府 住所：麹町区飯田町3丁目

(ないとう よしつぐ／わたなべ りょう)



「鷺沼海岸別荘地開発記念碑」登場人物の所有地分布図

原図：二万五千分之一地形図「江ノ島」（大正10年測図）×175% 一部修正

【凡例】○A=碑文登場者 B=発起人 C=建碑賛助者 （小文字）=次代

○網掛け区画地は、大給子爵家を除く開発初期（明治28年以前）に購入が確認された人（記号に下線がある）の購入したと思われる区画

（明治15年新字・地番設定測量決済図／明治28年 12月に大給近道氏所有地確認・承認に村長宛提出地図／旧土地登記謄本）による

鵠沼山万福寺

浅野陽子（会員）

はじめに

万福寺は東海道線藤沢駅、辻堂駅の間、線路北側約 300 メートル、西に引地川まで約 30 メートル、日本電気硝子は 4 メートル道路を挟んですぐ隣に位置し、東には鵠沼皇大神宮が近くにある、鵠沼神明地区に建つ鵠沼随一の古刹であります。

現ご住職荒木良正（あらきりょうしょう・鵠沼を語る会会員）師は昭和 46 年 3 月公害を排出し、多くの鉛中毒患者を発生させた、日本電気硝子に対して住民がつくった公害対策委員会の中心メンバーとして活躍され、会の拠点として場を提供されました。昭和 57 年 3 月、被害を受けた社寺・町内会に補償金が支払われ、公害問題の局を結びましたが、10 年余に及んだ公害追放運動が当地鵠沼に現存したことは 20 余年経た現在、知る人は少なくなりました。そこで、浅野が万福寺の概要を、渡部会員が日本電気硝子公害闘争と万福寺を執筆することになりました。

由 緒

当寺は鵠沼山清光院（こうしょうざん せいこういん）と号し、世に荒木萬福寺と称します。寛元 3（1245）年僧荒木源海が創立しました。源海上人は俗姓藤原氏日野真夏（まなつ）11 世安藤駿河守隆光といい、武州北埼玉郡荒木を領し、鎌足の末孫児玉党（武士の集団の一つ）の随一といわれました。隆光は最愛の二子を相次いで亡くし、遁世して江の島の岩屋に籠り修行していると或る夜夢告により（子どもが夢に出て）、常陸国稲田に赴き浄土真宗の宗祖親鸞聖人の直弟子となりました。後に関東六老僧の随一と称せられています。武州荒木において一字を建て、万福寺と称しました（現ご住職荒木良正氏は遠き系譜に繋がる）。仁治元（1243）年上京して、山科の興正寺に住み、親鸞聖人の傍近くに仕えました。寛元 3 年故郷へと志したとき、聖人の形見として、聖徳太子の直作といわれる尊像（木像）を譲られました。帰りの途中江の島の岩屋に参籠し、立像の阿弥陀如来を感得しました（夜の波間に浮遊する光るものを取り上げたとされる）。

その頃の鵠沼は砥上の広い野原であり、各地に樹あり、また沼地があり、人家も稀で村名も定まっていない有様でした。霊場をもとめて砥上ヶ原にきた源海上人は

鵠（クグヒ・白鳥）という水鳥の棲む沼地の一方を埋めて、一字を創立し鵠沼山万福寺と号し、かの尊像阿弥陀如来を安置し、これを開基創建されたと語り継がれています。

源海上人は専修念仏の法（他の仏様を拝まず万福寺の本尊阿弥陀如来の念仏のみ）を広めると、高貴な人も卑賤の人も、老若男女も悉く帰依したと伝えられています。寺務5年の後、真弟誓海に譲り（真弟とは実子で僧職を継承すること）、故郷荒木に帰り建長5（1253）年10月22日89歳にて遷化（この世の教化を終え、他の世に教化を移すこと・高僧などが死ぬこと）されました。

創立より現在まで二十五世、760年に至っています。

歴 代

開基源海—誓海—了誓—源了—唯了—了願—了順—空円—了空—唯順—唯願—了岸—中興良意—良寿—良念—再住良意—良覚—良慧—良隋—良海—良諦—良因—良空—良月—二十五世現在 良正

法 難

八代目空円は、時の権力者北条氏綱から宗派を改めるように命令されましたが聞き入れなかったため、茅ヶ崎の六本松で殺されてしまいました。

寺 宝

本尊 阿弥陀如来木造一軀 聖徳太子木造一軀 仏舍利三粒
御俗姓御文一卷（伝記） 宣如上人

なお、平成15年10月八角堂が新に建立され、聖徳太子が安置され、17日落慶法要が営まれました。

万福寺と俳諧

万福寺に俳諧師石年の墓があります。阿部石年、玄道、宝所等と号し、書家としても知られましたが俳句は「卯の花くもり」ほか多くの俳書に出句し、鳴立庵系の俳人でした。彼の名句に「光陰にゆとりの出来し梅の花」があります。

また幕末に藤沢俳壇の中心人物であった如々（大鋸感観院の住職）は、万福寺の蕉窓（二十三世良空）を中心とする鵠沼連を指導しました。

焦窓には「わくら葉に一ト日動て秋の蝶」の名句が、また鵠沼連の一人清水の句として「夫々の声賑ふや年の市」があります。

墓碑

大磯屋 俳諧書「磯清水」に入集している蓬泉こと猪飼甚左衛門の経営した飯盛旅籠大磯屋の飯盛女を葬った墓碑数基が眠っています。

阿部石年の墓 天保6(1835)年3月14日没。彼は阿部石年、玄道、宝所等と号し、初夏としても知られましたが鳴立庵系の俳人でした。「光陰にゆとりの出来し梅の花」があります。

内藤千代子墓碑(1893－1925) 鵠沼海岸に住む美人文学者で一世を風靡しました。「女学世界」誌のほか「生ひ立ちの記」「ホネムーン」等9冊の著作がある。肺及び咽喉結核で31歳の若さで亡くなりました。本人が建てたとされる墓は傾き、藤沢市の文化財として保護するよう望まれています。

森 銑三墓碑(1895－1985) ももんが同人 愛知県刈谷市に生まれました。近世日本の文化・学術面に貢献した人物の典籍の研究に従事する一方で、伝記学会を創立し雑誌「伝記」を出版しました。1947年から35年間鵠沼海岸に在住し、晩年は早稲田大学で書誌学を講じました。著作は「森 銑三著作集12巻・別巻1」(1970年～1972年)にまとめられています。勉強会のお仲間だったご住職荒木氏が墓所を提供されました。

参考資料

萬福寺由緒 鵠沼寺院考と砥上が原旅情 鵠沼を語る会誌『鵠沼』35, 37, 78, 79, 87号

インターネットから 浄土真宗、親鸞聖人、源海上人、歎異抄、興正寺等

なお、万福寺ご住職、荒木良正師は現在90歳になりましたが、現在も現役のご住職としてお勤めをなさっておられます。また鵠沼を語る会に緑陰例会として書院をお貸し下さり、今回の取材にも快くご協力いただきました。紙面をおかりして感謝申しあげます。ありがとうございました。

(あさの ようこ)

民 草 の 闘 い

—日本電気硝子公害と万福寺—

渡部 瞭 (会員)

はじめに

鵠沼^{こうしょうざん}きっての古刹、鵠沼山万福寺の裏門を出てすぐ西側の石垣の上に、下のような記念碑がひっそりと建っている。碑文は万福寺の荒木良正住職（鵠沼を語る会会員）の手によるものだが、極めて簡明で読みやすい。

その冒頭に、田中正造の歌が掲げられている。いうまでもなく、足尾銅山による渡良瀬川の鉍毒事件で被害者住民とともに闘った国会議員で、数々のエピソードが今日まで伝えられている。この事件は今から百年余りに起き、別子銅山鉍毒事件とともに、日本における公害問題の原点とされる。「公害」の語が一般的に定着するのは、水俣事件が明るみに出た1960年頃のことだが、この語自体は明治時代から使われていたらしい。公的に用いられた例としては、東京都が1949（昭和24）年に「公害防止条例」を作ったのが最初とされる。

記 念 碑

虐けの跡は毒よりはけしけり
馬にくわする民草もなく

この歌は、田中正造翁が、公害の恐ろしさを警告したものである。昭和三十四年四月、日本電気硝子が、藤沢市に誘致されて引地川畔に進出し、創業するや、騒音・悪臭・粉塵等の公害を排出し、人体・家屋・農作物に甚大な被害を与えた。又、煙に含まれる亜硫酸ガスのため、樹木の枯死するものも多く、緑の絶滅寸前の状態であつた。藤沢市長は公害の防止を急ぎ、放置したが、県の勧告により煙突の傘上げ、捨塵装置が設けられ、高い壁も造られて、公害は少しく緩和された。昭和四十六年三月、工場内外に鉛中毒患者が多く発生し、住民に一大恐怖を与えた。住民は公害対策委員会を強化し、公害追放運動を展開し、会社側と交渉すること十年に及んだ。一方、新藤沢市長葉山峻は、深くこの問題を愁い、吏員を督励し早期解決を図らしめ、幹旋に務めた。かくて、炉の移転・規模の縮小・酸化鉛の不使用となり、又、鉛中毒患者の治療も進んだ。遂に昭和五十七年三月、被害を受けた社寺・町内会に補償金を支払い、公害問題の局を結んだ。これより、再び大気は浄化され、青空が仰がれ、樹木は生い茂り、花は咲き、鳥はさえずる平和な郷土に蘇った。

昭和六十三年五月 鵠沼山主 識

この碑が建てられて間もなく、《藤沢市鵠沼神明公害対策委員会》は、公害闘争の経緯を『ここに歴史あり ―公害闘争と住民運動―』と題する175ページの報告書にまとめて刊行した。これは市内の図書館・文書館などで閲覧できるので、詳細はそちらに譲るとして、ここではその概要と背景を解説してみたい。

藤沢南部の工業化

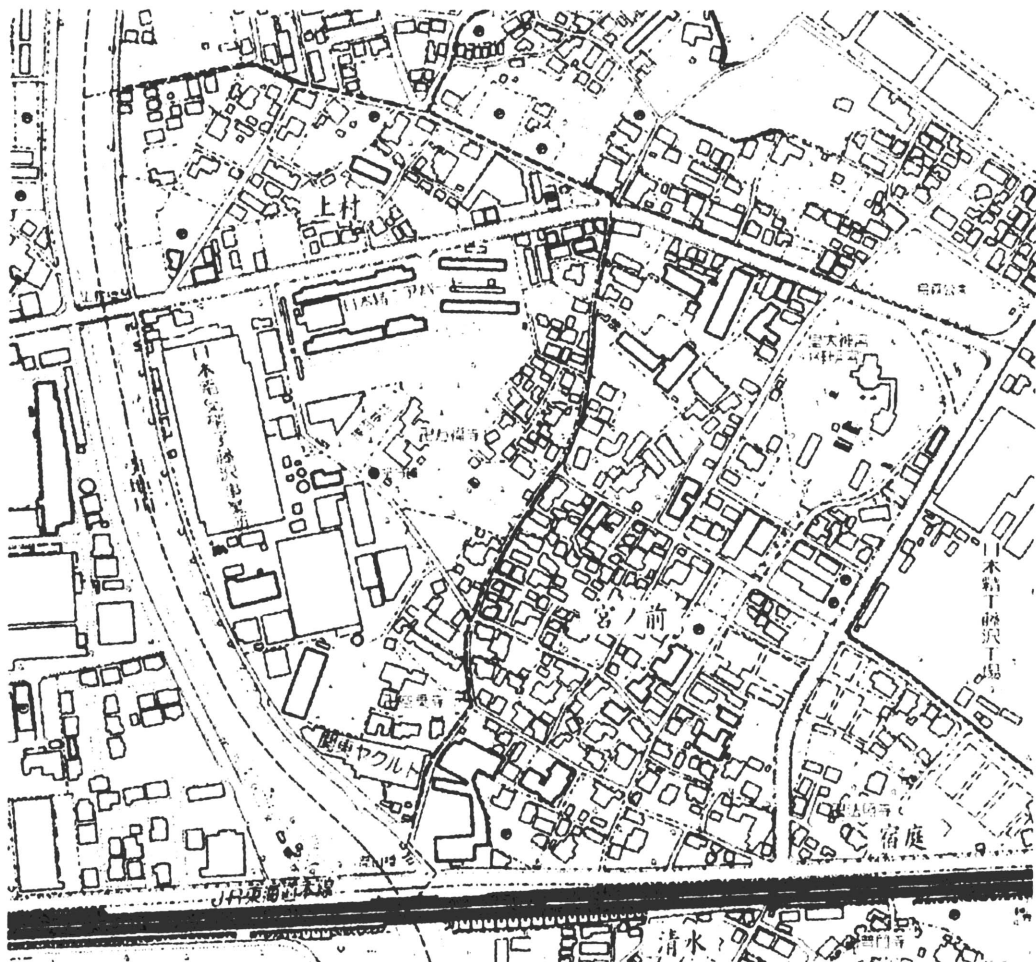
現藤沢市南部の明治以後の近代工業は、鉄道開通によって本格化する。初期はいわゆる農村立地型工業で、農業生産物を加工する製糸業(生糸紡績)や澱粉・アルコール醸造という分野が中心だった。この時代にも、工場の廃液が引地川に流され、魚の大量死が報告されたり、騒音や悪臭に周辺住民が被害を受けたりしたこともあったが、いずれも小規模・短期間のものであった。

金属加工分野では1921(大正10)年進出の東京螺子(現ミネベア)を嚆矢とし、関東大震災の復興期あたりから昭和10年前後の時代、小松製作所(小松熟練工業→関東特殊製鋼)さらには日本精工・高井精器といった工場が伸びてくる。これらは軍需工場として、大戦中に発展した。戦後は沈滞するが、朝鮮特需が復興のきっかけとなった。

1956(昭和31)年の経済白書は、「もはや『戦後』ではない。われわれは異なった事態に直面しようとしている。回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる」の有名な一節があることで知られる。

それから5年、「60年安保」の政治の季節を経て、池田内閣は「所得倍増」を旗印に経済の季節へと国民の目を向けさせるのに成功した。高度経済成長時代の到来である。東京オリンピックを契機に高速自動車道路や新幹線が整備され、陸上における物流の主流は鉄道から自動車へ転換した。県内でも、東京湾岸には自然海岸が消え、大型埋立地に「重厚長大型」を中心とする臨海工業地帯が発展していった。1961(昭和36)年に制定された農業基本法は、都市近郊の農業離れに拍車をかける結果をもたらした。相模湾側では、それまでの農業用地を潰して、電機・電子・精密機器・自動車関連・化学・薬品・食品等々の極めてヴァラエティーに富んだ各種工場が立地するようになった。

藤沢市南部でも、主に東海道線沿線に工場進出が目立った。これは、鉄道騒音の関係で住宅地に向かず、農地として残っていた安価な土地を自治体が斡旋したものである。そうした工場の多くは、通過する列車の乗客への宣伝効果を狙って、外装や看板・電飾、植栽・造園に工夫を凝らした。地理学者=田中啓爾は、これらを「車窓工場」と名付けている。



鵜沼地区では、1958(昭和33)年に関東ヤクルト製造、その翌年に日本電気硝子が鵜沼神明3丁目の引地川に面したところに隣り合って相次いで進出した。鵜沼地区におけるある程度の敷地規模を持つ工場進出の最後の例である。すなわち、日本電気硝子は鵜沼で最も新しい工場らしい工場ということになる。

この2工場が建った場所は、万福寺・空乗寺^{くじょうて}という古刹の裏手にあたり、引地川改修以前の地形図では測量のたび毎に曲流の様子が変化する不安定な地形上に位置する。そのために利用価値が低く、開発の手から取り残されていた。

「元祖鵜沼」宮ノ前と上村

日本電気硝子のすぐ東側には宮ノ前、北側には上村^{かむら}という集落が隣接する。この両集落は、いわば「元祖鵜沼」ともいべき伝統を持つ、極めて古い集落なのである。平安末期^{おおののみくりや}の大庭御厨が鎌倉権五郎^{ごんごろう}によって拓かれた中心地だったろうし、奈良期にあったという高座郡土甘郷50戸^{たかくらごおりとかみごう}というもの、このあたりを指すと考え

られる。さらに遡れば、一帯は西宮越遺跡と総称される遺物包含地で、弥生式土器や古墳時代の土師器・須恵器も発掘されている。この宮越・宮ノ前という地名からも解るように、神社を中心に発達してきた集落といえよう。その神社こそ土甘郷総鎮守に位置づけられる神明宮（皇大神宮）であり、その基礎となったのは延喜式内社の石楯尾神社とされる。少なくとも千年以上、あるいは2千年も前から、人間生活が、おそらく絶えることなく続けられてきたという土地柄なのだ。

有賀密夫氏の調査によれば、鵠沼本村を代表する9集落のうち、明治初期における戸数は、宮ノ前が45戸で最大、上村は11戸で最小の集落であった。

封建社会における農業集落においては、村落共同体という地縁的社会結合が見られたことはよく知られるところだが、鵠沼のような砂地で生産性の低い土地しかない上に、藤沢宿の助郷と鉄炮場の役負担という労働分担を強いられていた集落においては、村落共同体の役割はより重要であったと考えられる。また、庚申講や地神講などを含むさまざまな宗教行事、冠婚葬祭などが、村落の人々の結束を強めていった。

先にも見たように、鵠沼地区においては高度経済成長期に農村としての性格は急速に失われ、専業農家は現在は1軒しか見られない。農家といってもほとんどがいわゆる第二種兼業農家に過ぎない。しかし、「本村」においては、かつての村落共同体の名残をみつけることは、さほど困難ではない。古くからの年中行事や稲荷講などはまだまだ残っているし、皇大神宮の祭礼における幟立てや人形山車、祭囃子の継承などは、集落の結束を強める好機となっている。

日本電気硝子とは

さてここで、鵠沼に進出してきた日本電気硝子㈱とはどのような企業なのかを、同社のホームページを参考に探してみたい。

日本電気硝子は、戦時下の1944(昭和19)年10月、日本電気㈱（現、新日本電気＝NEC）などの出資により、滋賀県大津市で設立され、電球や真空管のガラス部分を製造していた。戦後、日本電気㈱大津製造所にてガラス事業を再開し、1949(昭和24)年12月1日、同社より分離独立、この頃は真空管用ガラスや管ガラスを手吹きで生産していた。1951年1月、ダンナーマシンによるガラス管の自動成形に成功、1956年にタンク炉による連続生産に移行し、管ガラスによって事業基盤を築いた。

そして、1959(昭和34)年に藤沢工場（現、藤沢事業場）を開設し、1965年、ブラウン管用ガラス（白黒）事業に進出、1968年にカラーブラウン管用ガラスの生

産を開始した。以来、日本のテレビおよびブラウン管産業の発展とともに成長してきた。一方、超耐熱結晶化ガラスや建築用ガラスブロック、電子部品用ガラス、ガラスファイバなどの生産を開始し、ブラウン管用ガラスを主力とする世界有数の総合特殊ガラスメーカーに発展した。

騒音・煤煙・粉塵＝第1期日本電気硝子公害問題

碑文を読んでみると、この公害闘争には2つの時期があったことがわかる。

第1期は、日本電気硝子が鶴沼に工場を建てて間もなく、周辺の人々が工場の発する騒音や震動に迷惑を感じたことが話題になり、農作物や樹木が枯死するに及んで、これも工場が建ってからの現象だと気付いたことから始まる。

1963(昭和38)年11月、上村・烏森・宮之前の3町内会は連名で神奈川県と藤沢市に対し、日本電気硝子藤沢工場から出る騒音・煤煙・粉塵による被害について、善処方の陳情を行った。公害闘争のスタートである。

県・市は日本電気硝子に対し陳情内容を指摘、会社側は煤煙・粉塵の調査は県・市に依頼し、独自で騒音調査を行った。その結果は基準値を若干超える箇所を数か所認め、年末に出された県の指導書に対してはコンクリートブロックを積み重ねてその対策とする程度に止まり、住民の満足が得られるものではなかった。住民側は次年度の7月に市に対して騒音・排ガスについて再度陳情した。

一方、会社側が県・市に依頼していた煤煙・粉塵の調査結果は、万福寺・空乗寺の樹木における亜硫酸ガス接触害を顕著とし、含有量は市の調査では一般数値としたが、県(農業試験場で分析)は極めて顕著と認めた。そしてその原因は亜硫酸ガス排出量の多いC重油を用いている工場排煙にあるとし、C重油を使用する近隣2工場のうち、卓越風向から見て日本電気硝子藤沢工場がその原因であると結論付けた。この結論に基づく県の改善指導に対し、当初会社側のとった態度は極めて消極的かつ緩慢なものであった。これに業を煮やした住民側は、工場に隣接する日本精工アパートの関係者、農業協同組合なども参加して組織の規模を拡大し、粘り強く会社や自治体と交渉を持った。最大の被害者でもある万福寺の荒木住職夫妻(夫人は上村出身)は、終始指導的立場にあり、会合などに寺の施設を提供した。万福寺はこの公害闘争の拠点となっていたのである。

1955年の神通川イタイイタイ病(富山県)、1956年の水俣病公式発見(熊本県)、1962年の四日市喘息(三重県)、1964年の阿賀野川第二水俣病(新潟県)のいわゆる四大公害病をはじめ、全国各地で公害闘争が持ち上がり、メディアの話題にもしばしば採り上げられたため、国民の関心も高まっていった。

こうして住民の粘り強い交渉、マスコミの世論喚起などに押されて自治体も指導を強化した。碑文にもあるように、この段階では藤沢市の態度は消極的で、むしろ神奈川県の方の方が強かった。これは、この問題を担当した部署が、市の場合は市内商工業の推進を担当する商工課だったのに対し、県は公害課が担当したせいであろう。市は当該工場を積極的に誘致した事情もあった。

1966(昭和41)年に入っても会社側の腰は重かったが、4月1日に開かれた県・市・町内会・日精アパート関係者・寺院と会社側の取締役・工場長による第6回対策委員会で、ようやく具体的な取り組み姿勢を見せた。これを受け、4月10日に念書を提出した。その主な内容要旨は次のようなものである。

- ①有害ガスの除去対策は煙突の嵩上げと集合煙突化を年度内に行う。
- ②粉塵除去は従来のサイクロンに加えてパックスフィルターを早急に設置する。
- ③騒音対策はコンプレッサー室・ボイラー室外側に防音壁を早急に設置する。
- ④公害の補償は、具体的に今後充分話し合いの場を持ち、解決に努力する。

この念書を受けて、被害者側は4月15日に町内会で検討、翌日会社側に次のような要旨の要望書を手交した。

- ①煙突の集合化は、年度内といわず、夏までに完成させること。
- ②震動防止対策が抜けているので、騒音対策に併せて早急に措置すること。

工場側は早速工事に取りかかり、この間、被害者側はその成果を検証すべく、各種の測定・調査を重ねた。煙突の集合化は結局12月までかかり、年度内が年内にまで、若干短縮された。

かくして、1963(昭和38)年11月以来の粘り強い闘争は、一応の決着を見た。しかし、問題はこれで解決したのか、被害者住民側は完全に納得したわけではなかったし、煙突の嵩上げは、有毒ガスを希釈する効果はあったとしても、被害範囲を拡大する恐れもあった。

全国の動きを見ると、1967(昭和42)年に公害対策基本法が制定され、翌年には大気汚染防止法と騒音規制法が、さらに1970年に水質汚濁防止法が相次いで制定されて、1971年には環境庁が設置されている。このことは、高度経済成長のツケが公害問題という形で拡大し、その対策が国家規模で取り組まれていった過程を物語る。

鉛中毒＝第2期日本電気硝子公害問題

1971(昭和46)年3月、被害者住民側の危惧は、恐るべき形で具体化した。

同月9日の市議会で、中西国夫市議(共産)が質問に立ち、「日本電気硝子藤沢

工場で従業員の中に鉛中毒患者が出ており、周辺に鉛公害を撒き散らしている疑いが強い」と指摘し、市側の対応を質したのである。当該患者7人は、氷川下セツルメント病院(文京区)の山田医師の診断で異常に高い汚染レベルを示したと報道された。会社側は「環境基準は守っている」と答えている。

神奈川県労働基準局は翌10日、藤沢労基署に会社側の代表を呼び、立ち入り検査の結果欠陥が発見された鉛中毒防止装置の改善を求める命令書を手交した。

この問題に対する周辺住民の対応は素早かった。前期の公害闘争で組織されていた《上村公害除去対策委員会》を補強し、《鶴沼神明公害対策委員会》を結成、12日には住民大会を開催したのである。住民大会では24か条の会則を採択し、宮崎誠一会長以下23名の役員を選出、顧問相談役に関根久男市議(故人・宿庭在住・日本精工労組出身・鶴沼を語る会会員)を据えて、本格的な闘争態勢を整えた。また、会社側に説明を求め、その煮え切らない態度に住民側が憤然となる場面もあったという。さらに、①会社の移転、②問題解決までの操業停止、③計画表の提出を求める要望書を手交する一方、16日には鉛中毒症の学習会を開いた。

これに対する会社側の回答は、18日に①移転・操業停止には応じられない、②住民に対する集団検診を行いたい、③計画表については《覚書》の形で提出された。これを受けて、翌19日に第2回住民大会が開かれた。その中で①会社側の検診を拒否、②公害資料の収集と学習、③資金カンパ、④自治体側への出席の要請、⑤自費検診の領収書保管などが話し合われた。その模様は同席したNHKや5大新聞(朝日・毎日・読売・サンケイ・東京)により3月下旬から4月上旬にかけて大きく取り上げられ、この公害闘争は全国的に知られるところとなる。

3月20日、当該工場従業員の鉛中毒患者が重症で入院したにもかかわらず、26日の住民総決起集会に招かれた会社側は鉛公害の事実を強く否定し、住民側との溝は深まった。4月にはいと工場周辺の土壌からも高濃度の鉛が検出され、これに不安感を深めた周辺住民は、万福寺に氷川下セツルメント病院で公害病に取り組んできた山田信夫医師を招き、自主検診の機会を持った。その結果、強い自覚症状を持つ住民13名のうち12名までが鉛中毒と認定された。

藤沢市も第一中学を会場に、労働災害の権威とされる横浜市大医学部の山賀岑朗教授による講演会を開催し、県とともに山賀教授を中心とする医療チームを組織して、5月末には住民の集団検診に踏み切った。会社側が提案した検診を住民がボイコットしたためである。その結果は、4人に1人は異常は認めながらも鉛中毒と認定される患者が出なかった。一方、山田医師による6月20日の第2回自

主検診では、新たに94人を鉛中毒と認定、市側の集団検診によるゼロと大きな食い違いを見せた。この差はどこから生まれたのだろうか。自主検診では高度な技術を要し、厳密な結果が出る《誘発法》を用いたのに対し、市側の集団検診では、一般的な《採血法》を用いたためと、ある新聞は分析している。この結果は、住民側に市に対する不信感を募らせたし、住民決起集会に呼び出された会社側は、市の発表を楯に鉛公害を認めなかった。

この間、5月前半には、公明党の調査で新たにフッ素公害の疑いも見つかり、市は県に対し日本電気硝子藤沢工場の全面操業停止などの強い措置をとるよう公文書で依頼した。県は同工場の一部操業停止命令を発するに至る。さらに、藤沢市議会は6月15日、住民から出された工場移転の請願を、全会一致で採択した。夏を迎える頃、闘争はデモ行進・座り込みなど厚みを重ねるとともに、《市政を明るくする市民の会》で、「もはや全市的問題だ」と論議され、湘南教祖が「子どもの命と健康を守る」立場から教研集会で問題提起し、日本電気硝子本社工場のある大津市の市民団体から連帯の申し出があるなどの広がりを見せる。

秋に入ってついに会社側は鉛公害を認め、操業再開を断念するなど、態度の変化を見せる。何年かぶりに美しく色づいた木々の葉を見て、人々は公害の恐ろしさを改めて認識した。と、ここまでを紹介して『ここに歴史あり』の記述は、いきなり1982(昭和57)年の闘争終結まで話が飛ぶ。

この間に何があったのかを、冒頭に紹介した記念碑から読み取ろう。「一方、新藤沢市長葉山峻は、深くこの問題を愁い、吏員を督励し早期解決を図らしめ、斡旋に務めた。かくて、炉の移転・規模の縮小・酸化鉛の不使用となり、又、鉛中毒患者の治療も進んだ。遂に昭和五十七年三月、被害を受けた社寺・町内会に補償金を支払い、公害問題の局を結んだ。」

葉山市長は、出馬前、夏の座り込みにも参加し、住民側に連帯感が生まれていた。この公害闘争は、荒木住職・宮崎会長・関根市議といった優れた指導者に恵まれていたが、何よりも村落共同体に培われた民衆の粘り強い底力の勝利といえよう。記念碑の冒頭に掲げられた田中正造の歌の語を借りれば、民草の力が虐げの力を跳ね返した闘いであった。それに終始深く関わった2人の鵠沼を語る会のメンバーがおられた。本来この稿は、彼らによって書かれるべきものである。

この闘争から会社側も多くのことを学んだ。現在の日本電気硝子(株)藤沢事業所は、《ISO14001》《ISO9000》をいち早く取得し、環境問題・省エネルギー問題に積極的に取り組む模範的事業所に位置づけられている。(わたなべ りょう)

「お話」シリーズ

「鵜沼の山岳信仰」

小林 典夫さん

小林典夫さんは鵜沼・原の辻にある出羽三山供養塔を何とか修復しようという強い思いを抱いています。少しでも多くの人に、この供養塔のことを知ってもらいたいということで、「お話」をしてくださることになりました。以下はその「お話」の要旨です。

江戸時代の末期、鵜沼からは出羽三山への講中と高野山への講中が行われていました。出羽三山に行くのにも高野山に行くにも、1ヶ月近い月日と相当な出費がかかり、当時の人にとっては一大事業であったのではないのでしょうか。

高野山巡礼参加者名簿が見つかり、いつの時代にどのような人がどのような思いで出かけたのかが偲べれます。

各地に残る供養塔

関東地方では、藤沢はじめ千葉県、埼玉県などに「羽黒山・月山・湯殿山」と彫られた百番供養塔の石碑が残されています。百番供養塔は、西国三十三ヶ所、坂東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所の合計百ヶ所の札所をすべて巡礼したことを祝って造立されたものです。関東では、百ヶ所巡礼を終えても、さらに「出羽三山」参りをしなければ、本当の百ヶ所巡礼を成し遂げたことにはならないとされていました。

出羽三山の信仰登山

出羽三山は羽黒山（414m）、月山（1984m）、湯殿山（1504m）の総称で、山形県のほぼ中央に位置します。出羽三山は山伏、修験の霊場として山岳信仰の高まりとともに平安時代から興隆しました。以来、三山信仰は民間信仰として東日本の各地に広まり、信仰集団としての講中などが組織されて五穀豊穡・家内安全・無病息災等を念願して三山を巡拝することが流行したのです。「霞場」と呼ばれる檀那（信者）組織を通じて講の形で集められ行われました。特に、江戸時代中期以降は、三山の巡拝成就を記念して供養塔を造立することが盛んになりました。

三関三度の信仰形態

関東から出羽三山へは、往復に1ヶ月近くかかっています。こんなに遠い出羽三山の登拝に人々をひきつけたものは、一体何だったのでしょうか。昔の出羽三山の登拝は山伏に先達され、縁起や伝説、教義などを聞きながら山中の修験道の曼陀羅空間を歩いたのでしょう。

羽黒山は現世の衆生を救う観音菩薩、月山は死後の世界を守る阿弥陀如来（＝月読命）、湯殿山は未来を象徴する大日如来を祀っています。出羽三山の信仰形態は「三関三度」といい、生まれ変わりを求める信仰です。

羽黒山では現世の仏の観音浄土、娑婆安穩を祈り後世極楽往生の修行をし、娑婆の関を越え生死の海を渡り、月山の極楽浄土に往くのです。月山で阿弥陀如来の妙法を聞き、その効力で苦域の関を越え、湯殿山の大日如来の寂光浄土に入ります（経を唱えながら難行苦行をし、現世の穢れを一度死んで無くし、身を清め、あらためて現世に生まれ変わるというもの）。

羽黒山の観音（現在）－月山の阿弥陀（過去）－湯殿山の大日（未来）

出羽三山参詣巡路

鵜沼講中の人々は出羽三山までの長い道のりを、どのような巡路で行ったのでしょうか。ここに参考としてあるのは明治4年6月29日－7月26日（27日間）のものです。巡路は、鵜沼－奥州街道（東京－宇都宮－福島－桑折）－羽州街道（上山－山形－名木沢）－北羽前街道（最上川・船、新庄－清川）－羽黒山－湯殿山・月山－六十里越街道（山形）－羽州街道－奥州街道－鵜沼。往復で日数は約1ヶ月、行程は約900km、費用は4両1分3朱と28,470文となっています。

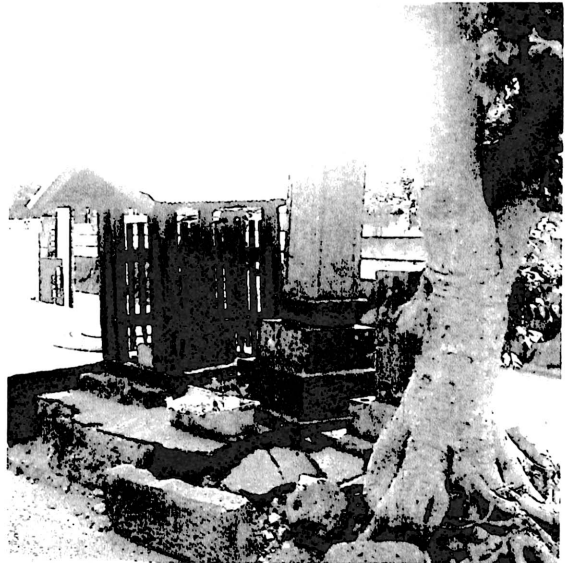
出羽三山塔と観音札所巡礼塔

藤沢市内における出羽三山巡礼塔（以下三山塔）の存在は鵜沼地区をはじめとして11地区で18基がみられます。北部地域に多く、南部では鵜沼、辻堂に3基がみられます。三山塔の造立年代は、江戸時代の中期から末期の90年間に及んでいます。平均的に5年に1基の造立の割合です。

三山塔には石碑中央に太字で「湯殿山」、両脇に細字「月山」・「羽黒山」の神号を記し、または神号の上に「大日如来」の種子「サ」を梵字で記したもの、および大日如来像を刻したものがあり、前側面または背面等に造立趣意・造立年月日・村名・造立者名が刻されています。

鵠沼・原の辻供養塔

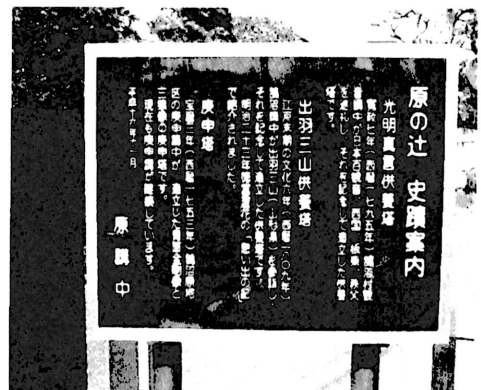
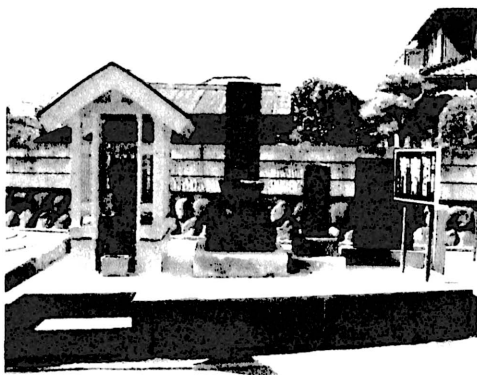
鵠沼・原の辻には観音札所巡礼塔、出羽三山供養塔、庚申塔があり、観音札所巡礼塔は「光明真言供養塔」で寛政7年、西国、坂東、秩父を巡礼したのを記念して造立したものです。出羽三山供養塔は江戸末期の文化6年の三山参詣を記念したものです。ご覧のように塔は傾き土台も傷んでいます。鵠沼のもうひとつの三山供養塔は万福寺・関根家墓内にあります。



高野山巡礼

高野山の塔頭慈眼院^{なつちゅうじげんいん}の宿泊者台帳を調べると正徳元年（1711年）から慶応3年（1867年）にかけての156年間に、鵠沼村から200名強の人が高野山巡礼に出ているのが分かります。慈眼院に宿泊し高野山真言宗高室院^{たかむろいん}を巡礼したのです。

修復なった原の辻 供養塔



昨年末、小林典夫さんたちの努力で原の辻の供養塔が修復されました

（平成16年6月8日例会「お話」 まとめ：企画委員会）

「お話」シリーズ」

「鵜沼皇大神宮の例祭について」

宮崎 誠一さん

今日の「お話」は鵜沼地区町内会自治会連合会副会長、皇大神宮氏子総代会会長、文化財皇大神宮人形山車連合保存会会長の宮崎誠一さん。宮崎さんは上村に17代という非常に古くから続いておられる宮崎家の当主でいらっしゃいます。

人形山車は「かながわの民俗芸能 50 選」「藤沢市重要有形民俗文化財」に指定され、さらに例祭そのものが「かながわの祭り 50 選」に指定されています。

はじめに

まずは、皆さんにぜひ鵜沼のお祭りを見ていただきたいと思います。勇壮華麗な9台の文化財の山車が参進して、神社に奉納の太鼓をたたく。毎年なのですが、こういうことを3〜4時間にわたってやります。

去年は御茶ノ水女子大の民俗研究の方々がお見えになり「ぜひ人形の着付けについて勉強をさせていただきたい」ということでしたので、上村町内で人形の着付け教室をやりました。大変に好評で韓国の方も中におりまして、朝鮮の衣装と日本の衣装の違いを実際に見て帰って「良かった」というお礼の手紙をいただきました。またこれも去年のことですが、鵜沼中学の生徒さん約30名に「鵜沼の皇大神宮とお祭り」について、お話をお願いしたいということでした。中学校の生徒さんに「鵜沼にいる以上、鵜沼の祭りを知ってほしい」という観点から、お話をしました。そのほかに平塚の博物館の方々が「鵜沼の祭りをぜひ見せていただきたい」という要望がありまして、来ていただきました。

しかしながら去年は雨のために、とうとう人形が一回も山車に飾れませんでした。このようなことは私の小さな時からの記憶にもありません。鵜沼の幟も人形も立たなかったのは終戦の昭和20年、私は軍隊に行っていたのでよく分かりませんでした。その時も幟が立たなかった。去年も15、16、17日の間、幟が立ちませんでした。こういうかつてない記憶を残してしまったのですが、神社の方そして我々、上村としても鵜沼のお祭りを、さらに皆さんに知っていただくために私はどちらにでも伺ってPRさせていただいているのが現状です。どうか今年はお天気が良かったら、ぜひ鵜沼のお祭りを見ていただきたいと思います。

9 台の人形山車

9 台の人形山車^{にんぎょうだし}というのは神奈川県では鵠沼にしかありません。ほかにあるのは伊勢原、足柄とかですが、大体3台とか4台ぐらいまでで、辻堂も含めて人形山車というのは4台ぐらいしかないのです。山車そのものを6台ぐらい持っているのは中井町にはあるのですが、人形はつかないのです。そういった意味で鵠沼の人形山車は大変に貴重な財産ではないかと考えています。

まず始めに鵠沼のお祭りは、いつごろから始まったのかという疑問があると思うのです。皇大神宮の宮司さんは今年で7代目と聞いていますが、私たちが知っているのは5, 6, 7代目で、4代目以前の宮司さんは、どこにおられたのか全然分かりません。その4代目ぐらいの人が、お祭りとか神社の経営に非常に関心をもっておられたということが基で、現在の形になっていると思います。それ以前は、高松家、あるいは岩田といったところ、それに万福寺とか、そういうお寺さんなどが長い間、管理していたようでございます。

お祭りに使われる幟でござりますが、古いものは文化、天保、嘉永といった時代の幕が複製としてあり、現在これらの幟が立てられています。大きさは横幅が3尺8寸、メートルにして1メートル14センチ。長さは41尺、12メートル少しはありますか、相当大きなものです。柱の長さが15メートル80、16メートルぐらいですね。それに飾りがついて依代の^{よりしろ}櫓^{やぐら}がその上につくというもので、18メートル以上の高さになっています。その柱は文化、天保の時代からあり、我々の部落は一对の幟を持っているのです。その当時、各部落は戸数にしてどのくらいあったのか、これが私には大きな疑問なのですが、明治20年代で上村の町内で19軒、これしか居なかったのです。それより遥か50年、60年前の文化、天保の時代になりますと10軒余りではないでしょうか。そういう昔の人たちが、幟を作って、それを奉納するという大事業をやっていたわけです。10何メートルの幟竿、これは杉材ですが鎌倉の方から荷車で持ってきて、それを加工して立てたというのですが、幟を立てる時に10人や20人では立ちません。柱が長くて非常に重いものですから、相当の支えを置いてやらないと幟は立たなかったはずで、今では皆さん^{みかげいし}御影石で全部^{やぐら}櫓を作って、そこに留めますが昔は、お祭り前日の14日の夕方、基礎を掘り、そこに幟櫓を作って、それで木内を全部組み立てて、そこに15日から17日までの3日間、朝に幟を立ち上げるというものでした。それは一町内ではできません。皇大神宮の前に幟を立てるのは上村、宮ノ前、清水、^{しよくにわ}宿庭の四町内だけで、皇大神宮の参道に一对の幟、8本を立てます。

鵜沼皇大神宮
人形山車



宮ノ前 那須与一



上村 源頼朝



清水 神武天皇



宿庭 源義経



荻田 徳川家康



大東 楠正成



仲東 浦島太郎



原 日本武尊



堀川 仁徳天皇

そのほかの町内はどうしていたかといいますと各町内ごとに、ある一定の場所を決めて、そこに小さな幟を立ててお祭りをしていました。ですから、その当時は山車もなければ太鼓もなかった、そういう時代が続きまして、山車ができたのが明治の中頃です。上村の山車の車軸の鑿^{たがね}が打ってあるのが明治 17 年、そして太鼓の購入時期が明治 13 年となっていますので、その頃からある程度、お祭りらしきものができたのかなと思います。昔の人を褒めるわけではないのですが、それだけ少ない人数の人達で、あれだけのものを作ってしまったということですね。

山車の維持に努力

5、6 年位前のことですが村岡町内で鵜沼と同じ山車を作りたいのが見積もってほしいという要請がありました。やはり 1 億円ではできないということになり、止めたようです。それから片瀬の先に腰越^{こゆるぎ}の小動というところがありますが、昭和 36 年に子供の火遊びで車庫が焼け 4 台くらいあった山車が燃えてしまったそうです。去年か一昨年に最後の一台ができましたが、何年もやっていないので引き方とか、いろいろなことが分からないので一度鵜沼の山車を見せて欲しいという

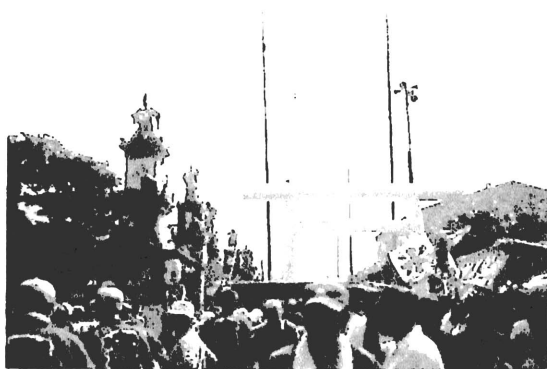
ことで私の方に来られたことがありましたが、相当金額が掛かったのではないかと思います。

仲東さんでは浦島太郎の人形山車ですが、上段幕は昭和の始めに作られましたが、すっかり日焼けしてしまい去年、文化財保存、教育委員会の方をお願いして人形上段幕を新しくしました。これは二段三層になっていますが二層のところ为上段の人形の一番下の幕ですが、これを架け替えただけで100万円近く掛かりました。これは皆さんの力によってできたのだから、ぜひ本鵠沼に持って行って見ていただこうとしましたが、去年は雨でできませんでした。今年はぜひ本鵠沼に持ってゆきたいというお話です。そういう風に100年以上、120年から130年最低でもかかっていますので、文化財でありながら毎年のように、いろいろな支障が出てきます。昨年、原町内の山車は鳥居に入る前に壊れてしまいました。回転軸が砕けてしまったのです。それで山車が回らないということで、回さずに引いてきました。今年、教育委員会の方に見てもらって、直ささせていただきましたが、やはり60万円近く掛かっています。その前は堀川町内会が人形山車を吊り上げてゆく回転軸のジャッキ、ギアが破損してしまい、どうしても人形が立たなくなってしまう、これを直ささせていただきました。このように大分古くなっていますので無理もないと思いますが、昭和38年に交通事情などが悪くなってきたので、山車を神社の方に一括して管理しようということになり、現在に至っています。

それまでは堀川から神社まで線路を渡って行ったわけですね。線路を渡りきる頃には、もう皆へトへト、夏のこの暑さですから、大変なのです。2時に神社に持っていかなければならないということで、帰りは本当に打っちゃってしまいたいぐらいに疲れてしまい明日取りに来るよとか、そういうことが実際にあったよ

うです。ですから相当そのころは雑に使ったこともあるのではないかと考えられ、原とか堀川の山車は相当疲れているのではないだろうかと、私は思うのです。

38年以降は日本精工さんのところに横並びをさせていただいて、2時に出発して3時に二ノ鳥居から境内に入るという決めをつくりました。それまでは上村、宮ノ前、



囃子を鳴らしながら人形山車が神社に入る

宿庭の町内の人々が、線路の間際まで荻田、原、堀川、大東、仲東の山車が入ってくるのを迎えに行くのが仕事になっていました。あそこで全部線路を渡ってしまっ
て整列して神社に入ってくるというのが、ひとつのしきたりになっていました。

皆さんの頭に入れて置いていただきたいのですが、山車そのものが非常に高い金額のもので、それを小さな部落で皆、作っていたということ。宿庭町内辺りは9軒位しかなかったそうです。その人たちが一生懸命、材木、山車の材料は殆どが^{けやき}樺ですから、樺を持ち寄って寝かせて作り始めたのです。大工仕事は線路から北側は、清水に居た林大工が全部やってくださった。線路から南側は大徳さんがやったという、いい伝えがあります。ほとんど釘は使っていません、組み立てですから直す時に大工さんが全部ばらします。すごい数になりますよ。山車は、そういうもので非常に精巧にできています。

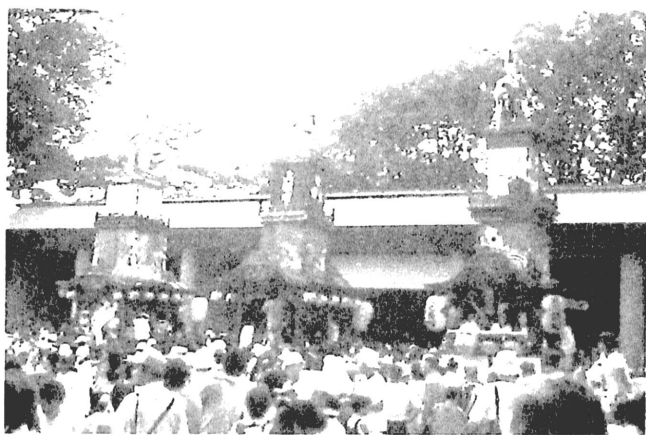
祭りの見せ方に工夫

まず人形山車の方から行きますと、今年は新しいやり方で行います。各町内から山車責任者2名ずつに神社の方に集まっていたき、今年のやり方を了解してもらいました。2時には日本精工の横から山車は出発しますので、2時半ごろには一ノ鳥居の辺りに来ているはずで
す。二ノ鳥居に3時に入って、9台の山車が全部入る3時半を目処にして、一斉に太鼓を止めます。そして3台ずつ山車を紹介し、その後、神社に向かって奉納の太鼓をたたき最低5回以上は山車を回すということが、決めになりました。

これはあくまでも試みでございます。皆さんの方から又、こういう祭りのやり方はどうだろうかという

ことがありましたら、ぜひ私の方に今後の参考になるように、お知らせ頂ければ有難いと思います。

9台の山車を3回に分けて紹介を終えますと又、一斉に太鼓を敲击出します。2時間のうちの貴重な30分を費やすのは、お祭りに来て頂いているお



神社境内に人形山車が勢ぞろい

客さまに良く知っていただくという狙いからです。今までは入ってきて終わるまで、ずっとダラダラしていたのですが、途中でひとつ区切りを付けようじゃないかということで、そういう決めにいたしました。

皇大神宮例大祭

次に神社の方の例祭はどうなっているかのお話をします。皇大神宮というのは相模國土甘郷総社、こういう風になっておりますが相模國は大庭御厨が^{おおぼみくりや}あった当時は、相模國8郡67郷となっていました。その中の土甘郷というところです。

頼朝さんの親父さんの義朝さんは保元平治の乱で清盛に敗れましたが、大庭、

鎌倉権五郎の子孫の大庭景親が大庭城におりました時に、その義朝さんがももとは境川を境にして鎌倉というのを、どこで間違えたか、引地川までは俺の方の領地だということで大庭御厨を壊してしまいました。天養1年ですから1145年くらいの頃ですかね。そこで大庭さんの方で伊勢神宮に、ということで壊されたから伊勢神宮の方から義朝さんに、そのようなことのないようにしてください、というお達しを出すよう申し出たと聞いております。

伊勢神宮には、皇大神宮から伊勢神宮へ年貢とか、そういうものが当時、納められていた記録がございます。そういうことで、それはやはり事実であったのかなと考えられます。

当時はまだ皇大神宮はあまり大きくなかったと聞いております。そういう歴史があり、今ではこの辺では皇大神宮は寒川神社、鶴岡八幡宮、江ノ島神社、その次が鶴沼皇大神宮ということになっております。

例祭の日には、こちらに例祭の式次第がありますが、これは第一、先ということで

平成十六年度

皇大神宮例大祭次第

平成十六年八月十七日(火)

午後二時半斎行

先、修祓(庭上祓所)

一、宮 司 一 拝

一、開 扉

一、献 饌

一、宮 司 祝詞奏上

一、献 幣

一、献幣使 祭詞奏上

一、浦安の舞 奏 上

一、宮 司 玉串奉奠

一、献幣使 玉串奉奠

一、役員総代玉串奉奠

一、参列者 玉串奉奠

一、撤 幣

一、撤 饌

一、閉 扉(垂簾)

一、宮 司 一 拝

一、退 下

修祓しゅうはつ、これは社の前で一回神様に降りてきていただいて、本殿の中に入る方のみお払いを受けて中に入るという儀式ですが、大体2時半に行われます。神主は大体12〜3名みえます。ずっとこの式次第通りにやっていきますが、毎年、大体2時半位から3時40分ぐらいまでかかってしまいます。

皇大神宮は非常に縁起がいいということで、来賓として呼んで欲しいという依頼が大分あるのです。本殿の中に入れる人数はせいぜい80名ぐらいですから、限度があります。来賓としてこられた方は絶対に玉串奉奠ほうてんをさせて欲しいということですが、こういう風になりますと非常に時間が掛かってしまいますので、ある程度のところで切るという格好になりますが、3時40分ごろには終わります。

祭りの最高潮 湯華神楽

その後、神楽に入るわけですが、神楽はこれもまた無形文化財になっておりますが、この辺では鎌倉、皇大神宮、白旗ゆばなかくらが湯華神楽をやっております。神楽の方は白旗神社さん、お諏訪さん、それから長後の今田の神主さん、それから鵜沼伏見稲荷の田村さんとか、そういう方たちがやってくれます。

宮司さんたちが着替えてやるわけで、10分ぐらい休憩を取って3時50分ごろから始めて1時間程度掛かりますから、5時ちょっと過ぎには終わるのではないのでしょうか。もう20年近く本殿に座ってみているわけですが、湯華神楽は豊年祈願であって、それで今年の湯立ちの加減を見て豊年を占います。その湯華、笹の葉の露が皆さんの身体に触れると、その人たちに幸せが来る、健康になれるという風に神楽を奉納しているわけですから、ぜひ一度皆さんも見れば有難いと思います。

本殿は広いようでも、神楽踊りになりますとちょっと狭いかなという感じですが。本殿の中は冷房が効いていまして、暑くて暑くて、大勢の人が入っ



湯華神楽で祭りの最高潮を迎える

ていますので扇風機ぐらいではとてもではないけれど、途中で出たくなるというのが実情でございます。

森の中で太鼓の音だけがガンガン響いてしまって、まったくマイクも効かないのが実情ですね。そして全部例祭が終わった時点を見極めて、山車の太鼓も打ち止めにするという風に決めています。ですから宮司さんの方の例祭が終わらないうちは、お祭りは終わらないということで皆さん徹底しておりますので、ひとつ湯華神楽、あるいはそういう最高の状態のものをご覧ください。

助け合いがあればこそ

実は私は「鵠沼を語る会」には2度ほど出させていただいているのです。昔の組制度の問題であるとか、あるいは鵠沼は半農半漁の地域であったということで、こういうことから、お話をさせていただいたことがございます。今度で「鵠沼を語る会」には3度目でございます。

本当に、くどいようですが、私は先人たちが、天保、文化、嘉永にかけて非常に少ない部落の人間が、これだけのものを作り上げてきた。そういう人間性といえますか、その団結性といえますか、まわりに迷惑をかけてはいけないという心から、そういうものを作り上げてきた。今度逆に相手方は、あそこは非常に大変だから手伝いに行こうとか、そういうようなことが実際に部落中で行われていたのです。私どもの上村はお祭りの時、私がまだ小さく小学校のときですから昭和7、8年頃、その頃は太鼓をまず覚えさせられ、小学校に上がらないと山車に上がって太鼓をたたけないというような時代でした。それに今みたいに道路が良くありませんから、山車は5人や10人では動くものではないのですね。上村の場合、必ず宮ノ前の町内、隣の町内の人が大勢、10人ぐらいは村境まで迎えに来てくれました。そこから一緒に引っ張ってくれるということです。そのような状態がずっと繋がって、今でもそういうことを恩に感じているのです。そして祭りが盛り上がっていったと、昔の助け合いは非常に良くできていたのですね。

明治5年に新橋、横浜間が開通し、その後、明治20年に東海道線が開通しているわけですが、その時、清水町内、宿庭町内を分断しているわけです。鉄道線路が入ったために半農半漁でありながら、そこにひとつの日雇いの鉄道モッコ担ぎの仕事があつた辺りでは、ずっと行われていたわけですね。そういうことで、若干潤っていたのかなと、それが何かのきっかけで、こういう状態に入ってきたのも、ひとつの要因かなと、考えられます。

我々の町内ですと、昔は山車を作るにしても、まず台車を作ったわけです。明治 17 年に台車ができているのですが、その時には部落の人たちが質権に土地を入れて台車の分だけ借りて、何年か後に返済し、今度は又、質権を入れて上物を作った。その後に人形を作ったわけです。このようなことを始めたのは上村が一番早かったように思いますが、上村は町内が小さかったために、でき上がったのは他の皆さんと同じだったのではないかなと、記憶しているのです。

古いことで、史実も何もありませんが、明治 13 年の太鼓がまだ一部残っています。そういうものが皆さんの町内にもあれば、保管されていた場所を調べていただけたら有難いと思います。山車そのものが年輪を経ておりまして、非常に傷みやすくなっています。なにぶんにも 100 年以上ガタガタ道を走ってきたものですから、そういう風になってしまったのではないですかね。

＊

本日は「鵠沼を語る会」ということで、くだけた話をさせていただきましたけど何かご質問あるいはご意見、鵠沼でこうしたらいいのではないかとかがあれば、私、割と前進形なので喜んでお受けしたいと思うのです。以上で、私のお話は終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

会員からの質問

Q： 以前藤沢の信仰のことを調べていたら、講中の塔などが北部では潰れているのに、鵠沼にはかなり残っているけど何故なのかと思っていました。鵠沼の町内は結束が強く神社のお祭りなども影響しているのかと・・・。

A： 先ほど幟立ての話をしましたが、人数が少ないので、どうしても町内だけでは立たないのです。どうしても他所の町内の力を借りないと柱が立ちませんから近くの部落は協力し合っていた。上村では大変だからということで、どこよりも早く大正 13 年に木の櫓は止めました。2～3 メートルも掘って櫓を組んで柱を立てる。これは難事業ということで御影石、現在ある形のものにしました。大正 12 年には関東大震災があり、私の家も傾き潰れた家もありました。その 1 年後の 13 年に、どうしてそういうことをやったのだろうと思います。その後、新しく作り直した時に、その大正 13 年建立の幟立ての基礎を上村町内会に、申し訳ないが運ばせていただきました。個人個人の偉大な力、団結の力といいますかね、そういうものが如何にあったかということを町内

会の皆さんに、お話をしています。ですから上村は町内としては非常に纏まっていると思うのです。

すでに7月7日に、一中さんと合同で防火訓練、避難訓練をしています。生徒の父兄と町内会の合同で70名ぐらいの人たちが参加して消防署にも届けをして、避難訓練をしました。一晚、一中の体育館に避難して翌日、解散ということですが、自分たちで飯を大釜で炊いて食べるという実体験もしてもらおうということでやりました。上村では古い風習は全部残してあります。稲荷講とか地神講とか、そういうものはずっと後世の人に伝えてゆかないと、一回切れると終わりですからね。やはり誰かがリーダーをやって残してゆかなければなりません。

Q： 今もモク（海草のこと）を拾い集め、鳥居に奉納しているのですか。それはいつ行われるのですか？

A： 上村では今もやっています。17日の朝4時に出発します。昔は歩いて海辺に行ったのですが、今は車ですね。車で行ってモクを拾って帰るのですが、今は無いのですよね、ホンダワラというのが。ですから七里ガ浜の方まで行く時もあります。

以前は、これらのモクを皆、鳥居に放り投げていたのです。今はそれを禁止しました。というのは昔は木の鳥居でしたから、掛けても別に被害は無かったのですが今はコンクリートの鳥居ですから、塩害になってしまうのです。塩気が多くて穴が開いて水が入って困るから絶対、鳥居には投げてはいけないということを指導しています。但し山車とかにはやってくださいと言っています。

Q： お祭りで子供たちに太鼓などを教えようとする女の子は比較的来るのですが、男の子は恥ずかしがって来るのは女の子ばかりのようですが・・・。

A： 上村では毎年、子供会と連携して太鼓を指導しています。敲けるようになると笛を教えるというのが今までのやり方です。他所の町内より部落が神社に近いですから、山車を神社から15日に引いてきて16日には町内でお披露目します。皆さんの子供たちが敲けるようになったということで、割合に集まりが良いのですよ。我々は口伝えで覚えましたが、今の子供たちは非常にリズム感が良いのですね。大体20日ぐらいで覚えてしまいますね。

（平成16年8月10日例会「お話」　まとめ：企画委員会）

「おれ」シリーズ

「昔の鵠沼の暮らし」

関根 佐一郎さん

関根佐一郎さんは明治 41 年、鵠沼・大東の生まれで 97 歳。現在も畑の仕事は勿論、軽トラックも運転しています。昭和 13 年に運転免許を取られてから無事故無違反。1 世紀近くにわたり鵠沼の移り変わりを眼にしてきた関根さんの大正時代を中心にした「お話」です。

第三小学校（尋常鵠沼小学校）の同級生は、今では関根おとみちゃん一人になってしまった。自分が生きてきた鵠沼の変化は、大正時代が一番激しかったように思う。大正時代、シナ事変、大東亜戦争、これら 3 つに区切った自分の人生が考えられるが、今日お話をするのは、そのうちの大正時代のこと。

まずは鵠沼の砂丘。川袋のところの高砂。小学生の子供の頃、部落のガキ大将だった。紙で日の丸の旗を作り、陣取りごっこをして高砂のこっちの丘、向こうの丘に日の丸を立てすべって降りたり、駆け上ったりして遊んだ。その砂丘があったのは今の松島苑あたりかな。

昔の鵠沼はもっと凸凹だった

鵠沼の地形は大きく砂丘と関っている。鵠沼の村の発生は砂丘が元だった。鵠沼の砂丘のなかでは、鵠中の上にある丘が背骨になる一番大きな砂丘だった。昔は砂丘が今よりも、高かった感じがする。開拓が進んで谷間を埋め立ててしまったので高低差がなくなったが、昔はもっと谷間があり鵠中のあたりは沢で今よりも 20 メートルぐらいいは低かった。それが埋め立てられ平らになり、周りの山が低くなった。谷間は田んぼにするため皆、埋め立てられてしまった。

砂丘は 3 つあるが、背骨になっている砂丘は今の尼寺が末端で、原の郵便局前（現在の桜が岡郵便局）の通りから鵠沼女子高の上にくいて新田の所から藤沢駅の縁まであった。今では平らになって分からないが、話では花沢町は大きな砂丘の山だった。原の郵便局の所から鵠洋小学校に行く所は砂丘の切り通しになっていて、風が強い日は砂が飛んできて大変だった。昔の車は木の車輪で砂にめり込んで通れなくなった。あとは石上の方の砂丘につながっていた。その頃、家は何も



昭和初期の畠道。現在の桜が岡郵便局あたり

なく砂丘を開拓して桃畑にしていた。新田山一帯は桃畑で桃の花が咲く頃には山がピンクに染まった。

砂丘が連なり田んぼのふちには池があり、鯉がいた。砂丘にはすでに松があったが大正時代に資本家、地主が砂防林と

して強い松を植えたので山林は皆、松ばかりで潤葉樹はひとつもなかった。子供の頃は桃園が作られ風をよけるために周りを松で囲い、林といえば松林そして砂州も松と、あたりは松ばかりであった。今の新田を通っている橘通りの関根さんが発端者、リーダーとなって開拓したのが砂丘のなくなる始まりであった。それが元で鵠沼の町ができた。開拓が始まると桃山は貸地となり坪当たり4銭で借りられ「4銭なら、いいな〜あ」と皆、いっていた。これが発端で砂丘がだんだん宅地になり、砂丘はどんどんなくなっていった。子供の頃だから大正の初めだったと思う。

もうひとつの砂丘は仲原工務店の上から始まる砂丘で、そこには千葉大学長の丹羽という先生の家と、あと2軒ぐらいしかなかった。その山が高砂とつながっていた。今もっておかしいと思うのだが、南風が吹くのに、なぜあの方向に砂丘が延びていたのか。仲原工務店の上からの古い砂丘は、今の松島苑の上で鵠中からの背骨となる砂丘と一緒にになっていた。高砂の地形は昔、赤木圭一郎が住んでいたあたりの畑、田んぼから上で北側は蓮池、南側は砂走りで馬蹄形をしていて谷間はもっと深かった。昔は家がなかったから砂丘が良く分かったし、鵠沼の地形はもっと凸凹であった。

聖天松原(？)、これは藤沢と鵠沼の丁度境に当たる所で今の藤沢駅のところ。これは聞いた話だが最初、鉄道省は藤沢駅を陣屋小路に作る予定であったが、煙を吐くものは嫌ということで住民の反対にあい聖天松原になった。ここなら人がいないから反対は起きなかった。このため大船駅と藤沢駅の間に大きなカーブが

生じるようになった。

藤沢駅の南、花沢町ではウサギが飛び跳ねていた。花沢町といえば、鵠中の砂丘の続きがあつて、そこは関根本家の山だった。大船駅を作るときに藤沢駅から引込み線を敷いてトロッコで砂を運んだ。大船駅の所は川が流れており、地盤がグズグズしていたので基礎が上手くできない。砂を入れると地盤がしまるので本家の山の砂を全部持って行った。その時、鎌倉時代、多分、新田義貞の頃のカブトが砂の中から出てきた。このカブトは関根本家に祀つてある。

鵠沼小学校のこと

鵠沼小学校に入学したのは大正2年。明治の頃の鵠沼の学校は普門寺に寺小屋式なものとしてあつた。親たちは寺小屋に行っていたが明治に義務教育になり、父親は藤沢の学校に行った。

今の鵠沼小学校の校舎があるところは昔は田んぼで、ドジョウをすくった。藤沢駅から鵠沼小学校の裏門のところに来る道には田んぼがあり、川が流れ、清水が入っていた。田んぼ、堀があつて授業中に川に遊びに行った。その田んぼも大東のチビッコ広場が丘だったから、その砂をトロッコで運び埋め立てた。

明治の頃は普門寺の中に寺子屋のような学校があり、大正時代になって藤沢町立鵠沼小学校ができた。

校歌に生徒数のことが出てくるが、最初400だったのが卒業時には600になっていた。「天龍眠る富士の嶺 地球うそぶく相模灘 秀麗ここに地を占めて 其の名もゆかし鵠沼校。 あゝ秋冷の氣に生きて 正義の旗を翻す 望みは高き六百の・・・」(戦前歌われていた鵠沼小学校校歌)

江ノ電鵠沼駅近くの仲原工務店の仲原はマラソン選手ではあつたが、鵠沼小学校まで通っていた。鵠沼の生徒はほとんどが鵠沼小学校にきていたことになる。校舎の真ん中に奉安殿があり天皇陛下の写



貴重な炊事用燃料となる落ち葉掻き(昭和6年)

真が飾られていた。玄関をあがって左奥に職員室、角に校長室があった。教室は3つだったが生徒の数が増えてきたので2教室がつくられたが、その後火事になった。当時は男女一緒のクラスで男女を分けるほどの教室がなかった。5月30日あるいは6月1日から農繁休暇があった。農家ではその時期、麦の取り入れ、イモを植えたりで忙しいので子供たちに学校を休ませた。全生徒が休むもので3日間ぐらいのものだった。

運動会は秋にあり徒競走、体操、玉ころがしといったもので、特に変わったものはなかった。遠足は乗り物もなかったし鎌倉か大磯ぐらいの所に行っていた。遊びといえば女の子はお手玉、男の子はメンコ。子供なりの生活の知恵があり、枝の先を尖らせた「じっくい」というのを使いメンコをやった。じっくいをパーっとメンコにぶつける。冬にやっていたがメンコをやるとじきに身体が温まった。

湧き水の出ているところで真珠

イトーヨーカドー近くの奥田は片瀬川の水が増えると、そこまで水がきた。そして舟も来た。川袋の水は高瀬邸のところまできていた。

鵠中から高瀬通りを横切り真っ直ぐゆくと蓮田で、昔はここまで川がきていた。この川は螺子のところからきていた。その頃は鎌倉郡であった。子供の頃、小さなエビをよくすくいに行った。水が湧き出ており、黒い貝が足に当たった。中からは真珠が出てきたが子供だったので、そのままポイと捨ててしまった。田んぼの中にも真珠ができるものなのかね、とその後思った。今思えば惜しい気もする。

鵠中の坂を上がり田んぼに降りた所が山口の田んぼ。青年たちが昭和天皇即位の御大典だからということで300坪ぐらいの池を作った。そこには湧水がやたらと出ており、水は温かかった。作った池で鯉を飼い魚万旅館に残飯を貰いに行き、鯉のエサにした。皆、代わりばんこにまじめに残飯を貰いに行き毎日バケツ一杯やっていたので、エサの量が多くなりすぎ池の水が傷んでしまった。どうしようかといっているうちに大水がでて池の水が溢れ、飼っていた鯉が皆、逃げてしまった。2度ばかり大水がきた。

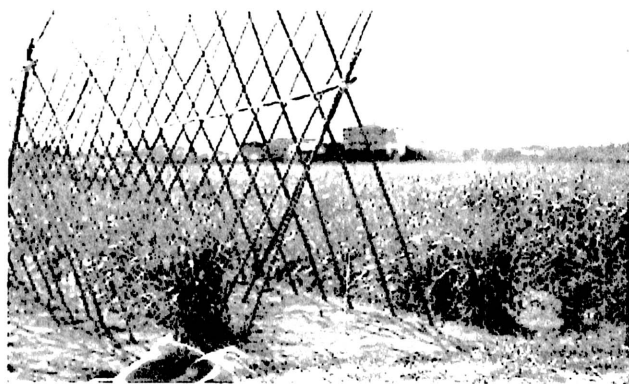
スズメが落ちてぐらぐらきた

大正12年9月1日の関東大震災のときは、雨が降っていたし学校に行ってもどうせ自習だから止めようということで家にいた。当時は乗り物がなかったので朝鮮牛に車を引かせた牛車が流行っていた。今の車検みたいなものがあり当日、東

海道の松林でその検査を受けていた。牛が引っ張る所に焼印を捺すのだが、ちょうどそれを下ろしたときに地震が来た。スズメが落ちてきて、立っていられない状態だった。がたがたいて、何がなんだか分からなかったし、なにしろすごかった。牛の綱を縛って家に帰ってくると湘南高校あたりに来たが、何もない。日本精工の前あたりの線路には機関車、貨物列車が全部倒れていた。津波は来なかったし、津波の被害があったとは聞いていない。ただ高砂あたりには地震による液状化現象が見られた。

橋代わりの鉄板

皇大神宮から柳原、本鵠沼の駅にかけて堀が流れていた。大東の森井商店前の道に大きな鉄板が敷いてある。森井商店のあたりは窪地で川が流れていて土橋がそこにかかっていた。今の辻堂団地の所は横須賀銃砲連隊の射撃場になっていて、



今の本鵠沼駅あたり。一面の麦畑（昭和3年）

そこに銃砲を運ぶ際にその土橋を壊してしまった。射撃の的に使っていた鉄板を持ってきて橋代わりにしたという。それが今も残っているわけで、当時いろいろなことに権限を持っていた自分が残すようにした。今、鉄板が敷いてあるところに橋があったのではない。いつの時代に鉄板が敷かれたかは自分は知らないが、自分が子供の頃には既に鉄板は橋としてあった。同じような鉄板は少し薄かったけど、竜宮橋のところにもあった。これは非常に貴重なものだから市に良く念を押し、処分しないようにしなくてはならない。

最近、茨城県の鹿島灘に行ったが海岸にはハマユウがあり、昔の鵠沼と良く似ていた。鵠沼にも昔は松露があり藤沢駅でお土産として売っていたが、丸い松露の味はすかすかしていた。松露は松茸と同じだが繁殖力が弱い。松露があれば初茸もあるのではないかと、話していたが皆なくなってしまった。

（写真：福地誠一写真集『鵠沼の五十年』より）

（平成16年9月14日例会「お話」　まとめ：企画委員会）

「お荘」シリーズ

「昔の天金通り 界限、町並みとエピソード」

大出 サキさん

大出サキさんは植文の娘さんとして大正 11 年に生まれました。植文さんは栃木県佐野の出身で、以前は桐生の織物を渡良瀬川を下って運ぶ回船問屋でした。三井の益田孝が鵠沼に別荘を持ったときにお抱えの植木職として、東京から一緒にやって来ました。植定、植藤、島金、植寅、植広さんたちが皆、植文さんのお弟子さんという鵠沼で最も古い植木屋さんです。現在、植木屋さんはしていませんが長いこと天金通りに住まわれています。

天金通りは正式には東仲通りですが、ものの本によると「天金という薬局があり、この名がついた」とありますが、実はベニヤ薬局が開店時に天金通りと入れたマッチを配り、それから天金通りになったというのが名前の由来です。天金さんのところは、もともと植文の土地でお風呂屋さんをやっていましたが、やめた後に東京から天金さんが来て、うなぎ屋を始めたのです。昭和 3 年か 4 年だったと思います。当時の町並みですが、大給さんとうちのおじいちゃんが縄をひっぱって道を作ったそうで、鵠沼の町並みは碁盤の目のようになっているのです。

天金通りを中心として

家から天金通りを海の方に行くと逸見千鶴子（歌人）さんの実家があり、笹森礼子さん（日活女優）が角にいました。それから川元さんのお宅があり姉妹がいました。ここには武者小路実篤や高見順が逗留していたそうです。その先の富士さんはお医者さん、関川さん・山之内さんは山之内一豊の何代目かということでした。遠藤さんは別荘ですから夏しか来られなかったようです。

家から東の方に八軒別荘がありましたが、ここは大磯の成瀬さんの貸家で画家の椿貞夫（岸田劉生の一番弟子）や俳優の岡田時彦（岡田茉莉子の父親、1930 年代に小津作品で活躍）と、その前の家に友人の河辺五郎（俳優「くらま天狗シリーズ」などに出演）がいました。昭和 7、8 年ごろのことです。そこから海よりのところに大蔵大臣の河田烈さん（第 2 次近衛文麿内閣 昭和 16～17 年）がいました。隣が佃さん（満鉄総裁）で、お嬢さんが河田さんへ嫁ぎました。南側は

(三井の石油関係の仕事をしていた) 千葉さんで、広がったですね(その後は三菱重工、沖電気の寮)。

河田さんの東側、涌井さんの所に日清製粉の寮があり美智子妃殿下(皇后)が疎開されていました。そこから白百合に通われていました。小学生までで、その後はお国の館林に行かれたようです。隣(尾名さん)に終戦後、小坂一也(カントリーアンドウェスタン、ロカビリー歌手)が住んでいました。

そこから川側(の各務^{かがみ}さん)のところですが、昭和4~5年ごろ、結核療養所の建設計画が持ち上がり反対運動がおき取り止めになりました。当時は藪で池があり鷺が来ていました。前は川で、療養所にはいい場所だったのでしょう。終戦後、鷺の卵を横浜の中華街に売りに行ったひとがいました。

坂の上からお馬さん

松島苑の上の方、天金通り先の坂の上あたりですが、後藤さんのお宅があります。材木業を営んでいたようですが、息子さんがバロン西と知り合いでよく馬に乗っていました。馬に乗り坂から降りて海に向かってくると「お馬のお兄ちゃんが来た」と呼んでいました(バロン西は1932年のロサンゼルスオリンピック馬術大賞典で金メダル。習志野第14連隊で戦車隊の隊長として硫黄島へ出向き戦死したが愛馬ウラヌスが、その1週間前に死んだということで馬術界では有名な話)。

海の方に下って服部さんのお住まい、横浜で菓子の輸出をされていたようです(植文が出入りしていた)。昭和3年の昭和天皇即位御大典の記念撮影を服部さんのお庭でしました。この写真には自分はいませんが父が栃木県出で八木節を踊るのが上手かったの

で皆、八木節の身なりをしています。隣は笠原文房具店でその後、鶴沼駅の方に移りました。ひとつ海寄りが鳶職組長の若林さん。その頃は砂原で良く遊び



服部邸にて八木節の衣装で御大典記念撮影

ました。四つ角のあたりには昔はずいぶんお店がありました。魚屋さん、乾物屋さん、ガラス屋さん、お菓子屋さん、薬屋さん、写真屋さん、ケーキ屋さん、それにカマボコ屋さん、今では皆なくなっていました。

学校帰りにバラ山に

今の日本精工の寮があるところがバラ山で、やまぶどうや桑の実がなったりしていたので学校の帰りに食べて、よく親にしかられました。あそこはとっても楽しい所でした。鵠洋小学校のところが畑で、その向かい側は桃畑でした。畑には麦が終わるとナス、キュウリがあり学校（鵠沼小）帰りにお腹が空いてキュウリを1本頂いて、ずいぶん怒られ追っかけられました。鵠洋小学校の前に松林のある斉藤山があり、ひとさらいが出たので隊を組んで学校から帰りました。女の子6人男の子1人の7人でしたが、よく「男のくせに先に立って歩かないなんて」と男の子をいじめました。今も近所に元気で住んでいます。懐かしい話です。

天金の角から

佐分利信が天金さんの奥に住んでいました。昭和10～12年ごろのことです。家の角を曲がって帰るのですが、靴の音がコツコツと違うので「サブちゃんが帰ってきたよ」って、直ぐ分かりました。奥さんは黒木しのぶという元女優さんで、綺麗な方でした。妹の石崎フミさんが女学校で一緒だったけど、サインをして欲しいとファンレターが一杯くるけど、お兄ちゃんはしなくて全部お姉ちゃんがしているのだ、と言っていました。口をきいた事はなかったけれど、大柄でガッチリした、すてきな方でした。でも赤ちゃんが生まれるときにはタライを買いに来て「ああ、あの人もタライを買いに来るんだ」と言ったものでした。

湘南学園の方に行ったところに社会党の森嶋守人代議士がいました。社会党のことを口にすると「社会党のなんたるかも知らないくせに何をいうか」と直ぐ怒りました。隣にバレエ研究の横井茂さんのお母さんがいて毎週のように宝生九郎が来ていました。袴姿でかばんを持ってくるので、最初どういう人かと思っていましたが、着くと直ぐに着替えて三味線を弾き唄うので長唄の先生かなと思っていました。茂さんが七里ガ浜のパブロババレエ教室に通っていて、その後モダンバレエでイギリスに行ったようです。その隣の寺田さんのところに寺田寅彦が、時々来ていたそうです。そこには以前、震災前のことですが購買組合所（岸田劉生の鵠沼日記にでてくる）があつて缶詰などを販売していたそうです（当時、鵠

沼では手に入らなかった石炭なども扱い別荘に用達していたよう)。

少し離れますが湘南学園に通じる道に八橋別荘があり、ステルンさん(帝大で法律を教えていた)がいました。昭和3～5年ごろでした。毎日のように東京に行っていたようです。鵜沼駅から帰ってくるので「お帰りなさい」と言うとビスケットをくれたりしました。口笛が大嫌いで、そのことを知っている男の子たちがわざと口笛を吹くと、ものすごく怒っていました。家の角でステッキを3回ほどぐるぐると回して家に帰っていきました。外人さんだから髪がちりちりで、おかっぱ頭をしていました(八橋別荘の手前にはパールバックの「大地」、ヒットラーの「我が闘争」の出版をした第一書房の社主であった長谷川巳之吉がいて、戦後間もない頃、林 達夫らと夏季鵜沼大学を開いた)。

楽しかった子どもの頃

当時(昭和6～7年)、江ノ電(藤沢－鵜沼、鵜沼－江ノ島)は子どもが3銭、大人は5銭でした。2、3年生のとき50銭貰って遊行さまにお参りに行って、電車賃3銭残してあとは全部、綿飴などに使ってしまいました。

別荘に帰られる方は、鵜沼駅から人力車に乗りますが駅前の坂のところ



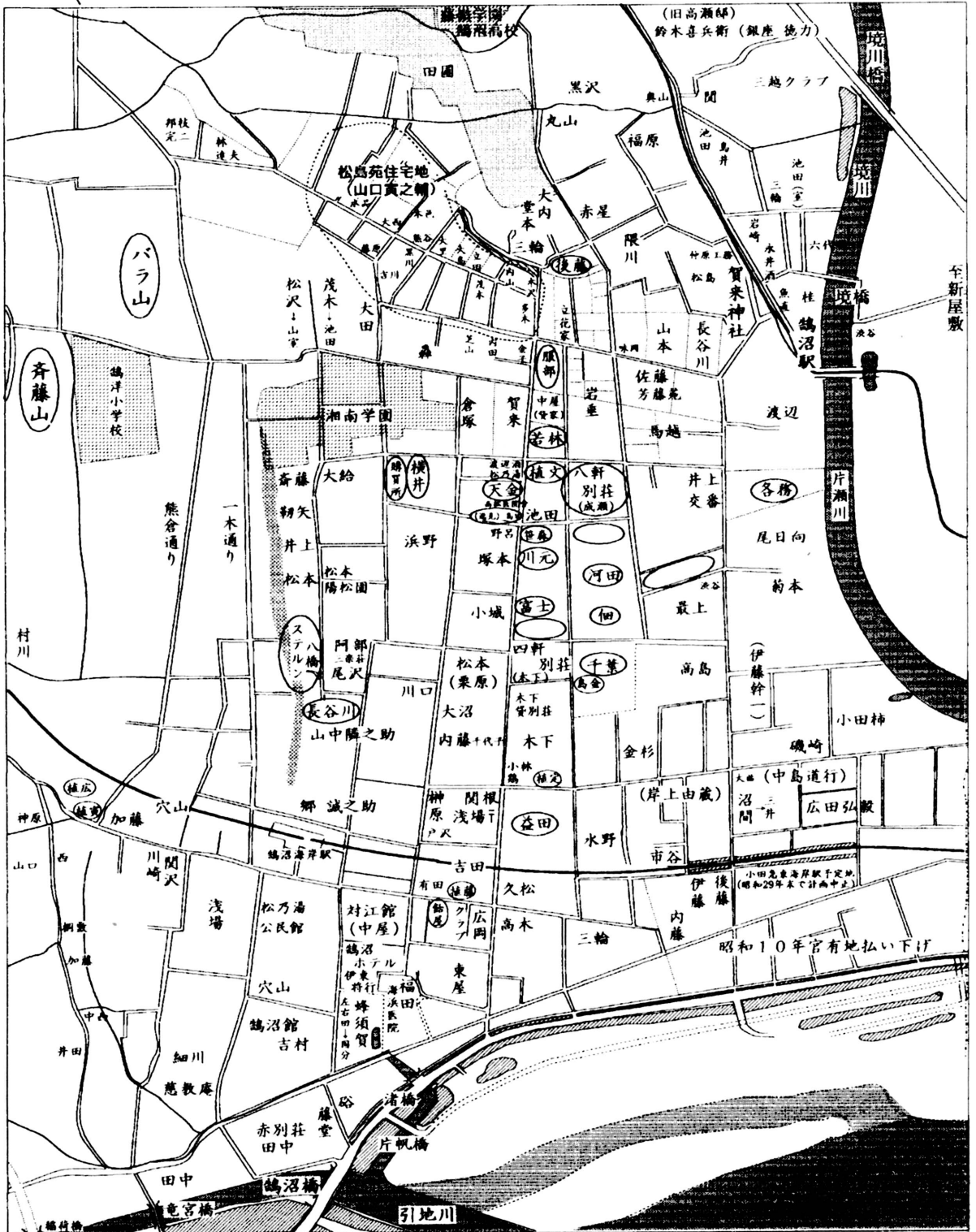
人力車とタクシー(大正末～昭和初期、別荘地の道)

に4台位が待っていました。海岸に遊びに行つて帰るときテクテク歩いていると「乗ってゆけ」と声がかかり、子どもだから1台に2人は乗れるので4、5人のときは2台、3台の空き車で家の前まで送ってもらい親に呆れられました。

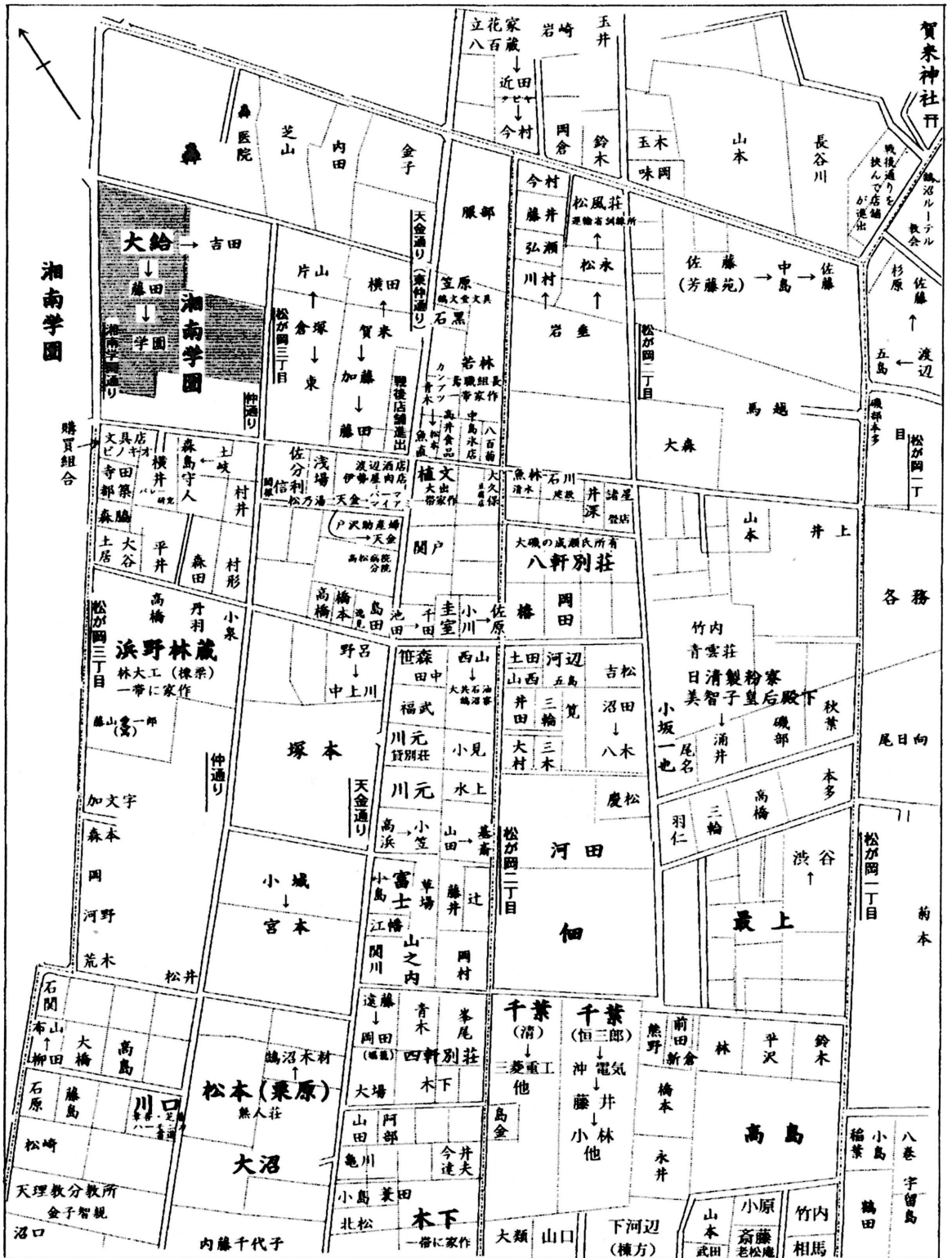
地元の皆さんに可愛がられ、雨が降れば「傘を持ってゆけ」、海に行けば「魚を持ってゆけ」、黄金あめ屋の前を通れば「甘酒を飲んでゆけ」と声をかけられ、あの頃は本当に楽しかったですね。

(平成16年12月例会「お話」 まとめ：企画委員会)

鵠沼海岸南部別荘地地図



天金通り界隈の家並み拡大



鵠沼と城夏子

鈴木 三男吉(会員)

私の頭の中にはいつの間にか「城夏子」という名前がしっかりと根を下ろしてしまいました。これには思いがけない人と人との関係が深くかかわっているような気がします。第一書房の長谷川巳之吉氏が、通称「富士見坂」の洋館から松ヶ岡 3 丁目に移ってこられたのが昭和 18 年、私が結婚しても家がないのでとりえずとって東京から鵠沼松ヶ岡 4 丁目の別荘に移ってきたのもやはり昭和 18 年、筋向かいというには少し斜線が長すぎますが、目と鼻の先といえるほどの近さでした（現在でいうと、宮本・角邸(長谷川)と岩沢理髪店(鈴木)です）。そんなわけで路上でお会いすることも度々ありました。

これがいつ頃であったか、はっきり記憶していませんが、たぶん戦後間もないときだと思います。ある日小田急鵠沼海岸駅の江の島よりの踏切の近くでお会いしたとき、「城夏子」が住んでいたのはあの辺りだったのですよ」といって指を差して教えて下さいました。城夏子が鵠沼にいたことはすでに長谷川さんから聞いて知っていましたが、それ以上のことはなにも調べていませんので、「あ、そうですか」と応えただけでした。私の頭の中は、戦後の混乱をようやく切り抜けたばかりで、再生の道を探るのに精一杯でした。

一方、長谷川氏は同じ出版界にありながら、昭和 19 年には早々と戦局の前途に見切りをつけ、堂々と出版廃業宣言を公表し、造詣の深い古美術を中心に悠々自適の生活に入っていたのです。出版の理想を高く掲げて創業した第一書房長谷川にとって、次から次ぎへと容赦なく押し寄せてくる戦時規制の波は許し難いものであったに違いありません。長谷川さんはその後、昭和 29 年松ヶ岡 4 丁目の女傭衣奈多喜男氏(朝日新聞社)邸のすぐ隣に移り、昭和 48 年 10 月ここから永遠の旅に立たれました。(享年 79 歳)

しかし歴史の流れは不思議な因縁で変わります。それから 50 年近く経ったある日、千葉流山市の協栄年金ホームから一通の手紙が届きました。むかし出版社に勤めていたときの友人で、社内結婚し夫に先立たれた未亡人です。夫の持ち物を整理していたら貴重品が出てきたので是非手渡したいというのです。やはり同じ出版社に勤めていたその人の妹と三人で銀座で会いました。貴重品というのは、戦後いち早く結成されたその出版社の労働組合の機関誌の合本です。つい昨日まで同僚であった人々が、一夜明ければ資本と労働という二つの陣営に分かれて、罵り合わねばならなかったときの産物です。確かに我々にとって思い出の深い貴重品です。この未亡人の夫が初代委員長であり、私が組合対応の役員になったのですから話はつきません。

懐かしい話もようやく終り、お互いの現況を語る雑談に移ろうとしたとき、

真っ先に私の耳に入ってきたのが、「鈴木さん、城夏子という作家ご存じ？」でした。「この方私どもの老人ホームに入居していらして、もう20年にもなり、お年も80代の半ばを過ぎていらっしゃるんですよ。まだとてもお元気で誰れ彼れの区別なく話しかけ、最後はお互いに大笑いするんです。その上50歳も年下のボーイ・フレンドもいるんですよ。すごく個性的な生き方なんです。」城夏子が鶴沼に住んでいたこともすでに知っていました。おそらく作品を読んで知ったのでしょう。



私はこの話を聞きながら、思いがけない場所での思いがけない話、人間の縁というものの不思議さをしみじみ感じた次第です。

こうして私の図書館通いが始まったのですが、城夏子自身の直接書いた「執筆年譜」をみて漸く城夏子の人間像をかすかながら描けるような気持ちになりました。執筆年譜は昭和56年に講談社から刊行された『林の中の晩餐会』の巻末につけてあり、その範囲は執筆だけでなく家庭問題にまでも及んでいます。大抵の人は書きたがらないことを、ここではあからさまに描かれていて、城夏子が非常に明るい率直な性格であることを物語っています。

この年譜によれば、城夏子が、鶴沼にある夫の知人の別荘を借りて移ってきたのは、どこを向いても戦時色一色となった昭和17年3月のことで、わずか3年足らずの短い期間で、早くも昭和19年2月には、夫の故郷秩父へ引き上げてしまいました。夫の肺浸潤が悪化し、その治療に必要なバター、卵などの栄養物が手に入りにくいという理由です。そして翌年の8月15日敗戦の詔勅を涙を流しながら聞き、翌9月12日夏子の手厚い看護も空しく永遠の眠りについたそうです。これだけならば、鶴沼は夏子にとって悪い思い出ばかりの土地であったのですが、年譜の昭和17年の項に、「この町で第一書房主長谷川巳之吉を知る」ともあります。そこで思い出したのが一冊の本です。

その本とは、林達夫、福田清人、布川角左衛門編著『第一書房長谷川巳之吉』（日本エディタースクール出版部）であります。長谷川氏が亡くなってから8年目の昭和56年5月、第一書房関係者が中心となり、「長谷川巳之吉さんをしのぶ会」を銀座で催したとき、今年こそはとって結実したのが本書です。実質的には女婿衣奈氏（元朝日ソノラマ社長）のご尽力の結果ですが。内容は＜その生涯と事業＞＜回想＞＜巳之吉遺文＞、資料としては＜第一書房刊行図書目録＞＜長谷川巳之吉年譜＞から成り、追悼録として完璧な出来栄えといえます。そして意外に思ったのは、＜回想＞を執筆された林達夫、谷川徹三、高橋健二、飯沢匡など男

性の学者、評論家のなかにただ一人女性の城夏子が名を連ねていることです。「辱知十年」と題する追悼文の一部を紹介しておきましょう。

・・・「昭和十七年三月、私は夫の知人の小さな別荘を借りることになり、鵜沼に移った。近くに桃畑があって丁度花をつけだした時なので、まあいい土地に来たと喜んだが、やがてもつといい事にめぐり会った。ある日、線路の向こうを珍しがって歩いていたら、竹林を背に私をはっとさせる表札が目についた。

あらーと声を出して立ち止まった。同時に私の脳裏に蘇ったのは、麴町一番町の第一書房の白い社屋だった。まあ、あの長谷川巳之吉敬白の、長谷川巳之吉氏がこんなところにいらっしゃる……」と。

そして数日後、臆面もなくお訪ねし、初めて面識をえたそうですが、その日客間に通されるとそこに林達夫氏がいらっしゃるので二度びっくりしたとのこと。

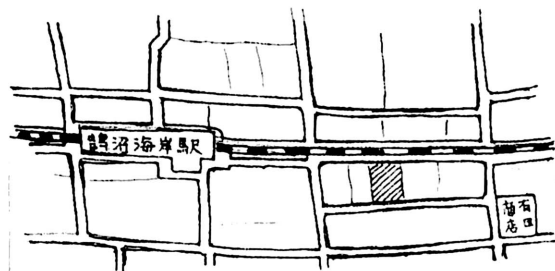
それ以来城夏子は長谷川氏を先生としかお呼びできなかったといっています。城夏子が長谷川氏を心から尊敬していたことは分かりますが、長谷川氏も城夏子の才能を高く評価していたことは、この書物の編集者が、城夏子に追悼文の執筆を依頼したことによって分かるような気がします。やはり鵜沼は城夏子にとっていい思い出の地であったともいえます。

最後にもう一度年譜に戻しましょう。――城夏子は仕事のため昭和 23 年秩父より上京、書けば売れるという時代背景も手伝い、新聞・雑誌の執筆範囲をひろげ、貯金もでき、板橋常盤台に小さな土地を買い家を建て薔薇で囲む。昭和 28 年ポプラ社より偉人伝文庫の一卷として「尾崎紅葉」を刊行、文壇からも好評を受ける。これを機会に「日本近代文学会」へ入会、昭和 44 年老後のことを考え千葉県流山市の協栄年金ホームへ入居、終の棲家とする。

ここで執筆をつづけながら人生の黄昏期を思う存分楽しみ、平成 7 年 1 月 13 日、93 年の生涯を閉じることになりました。

右の地図の斜線の部分が城夏子の住んでいた家です。現在は太田家として三棟ありますが線路に近い棟です。

<鵜沼海岸二丁目 2-2-17>





又
此
書
中
の
語
を
以
て
に
お
か
し
ま
し
た

2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

[illegible]

つゝ
い
ち
で
戸
皇
女
子
子
子

n
H
3
y
下
7
7
1
7
L
L
あ
う
て
め
い
n
?
田
谷
一
三

今より
 12月1日
 12月2日
 12月3日
 12月4日
 12月5日
 12月6日
 12月7日
 12月8日
 12月9日
 12月10日
 12月11日
 12月12日
 12月13日
 12月14日
 12月15日
 12月16日
 12月17日
 12月18日
 12月19日
 12月20日
 12月21日
 12月22日
 12月23日
 12月24日
 12月25日
 12月26日
 12月27日
 12月28日
 12月29日
 12月30日
 12月31日

[illegible][illegible]

は
百
二
十
六
お
い
け
た
さ
う
す
く
ー
て
ま
う
元
々
に
下
ら
る
と
い
う
こ
と
は

[illegible]

九
十
十
七

337

467

名古屋市中區松月町
四十一

有去豐小松

43
山
市
東
深
井
の
口

(2)

ここに紹介しました手紙は城夏子から有吉豊子さんに出したものです。有吉さんは、城夏子が鶴沼にいたとき井沢家の一員として城夏子の家の駅寄りのすぐ隣に住み、城夏子に大変可愛がられたそうです。有吉さんの妹、星島和子さんが藤沢市遠藤にいらして、その方が会長の有田氏と小中学校の同級生ということでお願いしたそうです。資料はこの他手紙 2 通、葉書 2 枚、写真 1 枚、著作 3 冊がありました。有田会長をはじめ関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

黒崎義介画伯生誕100周年記念式典に参加して

浅野陽子（会員）

2月末のある日、日本画家の私の師匠でもある尾形久子先生から「黒崎義介画伯生誕100周年を記念して、平戸で展覧会があり、藤沢の保存会の人たちがツアーで行くけど、私は別のルートで行こうと思う。貴女一緒に行かない？」とお誘いをうけた。数日後別件でお会いした市川氏（語る会協力会員）がこの展覧会のプロデュースをし、パンフレットも作成されていることを知り、さっそく見せて頂いた。そこには童画とともに数点の日本画が載せられていた。

黒崎先生は小説家今井達夫氏、大仏次郎氏、遊行寺ご住職等、藤沢の文化人の集い「スワン会」のメンバーのおひとりで、兄も仲間だった。「会」を我が家でしたり、二次会に使用したりなさっていたご縁で、私も親しくしていただいていた。それにご長男の真宏さんは鶴沼中学校の同級生でもあった。しかしパンフレットを読むうちに、よく存じあげていると思っていた黒崎画伯が長崎県の平戸のご出身であり、20歳で上京され、川端学校に入学して日本画家を志ざされたこと等、殆んどなにも存じあげないことに気づいた。手元不如意だけれど「生誕の地、平戸に行こう」と思った。

幸い尾形先生が格安チケットを手配してくださり、飛行機代、ホテル代こみの往復 26500 円で行けることになった。3月11日午前10時25分羽田発長崎空港行きに乗り、12時40分着、空港から佐世保経由で平戸まではバスで移動した。

宿に到着したのは5時近かった。朝7時半に自宅を出て、9時間あまりも経っていた。翌朝、宿のバスでオランダ橋まで行き、オープニングには少し時間があつたので散策することにした。展覧会場の文化センターとは平戸港の対岸にあたる丘のうえに、聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂、その真下に光明寺、そのまた下に瑞雲寺があり、港から見上げると寺院に重なるように天主堂の尖塔が望まれ、案内板にも「寺院と教会の見える風景」と書かれた石畳の階段と坂道をのぼった。天主堂からは平戸港、対岸の平戸城、最教寺等が一望でき、息をのむような見事な景観であった。こんな素晴らしい環境のなかで黒崎画伯はお生まれになったのだ、品位と清冽さ、あいらしさの感じられる画風はこのような環境の中で育まれたのだ、の感を深くした。

ご自身も展覧会のオープニングに招待され、会場に向われる地元のご婦人と偶

然に出会い、案内していただきながら会場にむかった。「静かですね。展覧会のポスターも見当たらないし、本当に文化センターで展覧会があるのですか」と心配になってきた私たちに「平戸はいつもこうですよ」と苦笑がかえってきた。

会場入口ではちょうどオープニングセレモニーが始まるところで、大会会長の童話作家大田大八氏、平戸市長、長崎県知事、黒崎本家から甥の洋介氏、藤沢から真宏氏、保存会会長の西山栄一氏がテープカットをされた。会場を大ホールに移し、スクリーンで画伯の紹介ビデオ（日本テレビ昼の番組『おもいっきりテレビ：今日は何の日平成14年8月』）が放映された。10時から記念式典になり、各界代表の挨拶の後、藤沢市の黒崎義介画伯作品保存会から画伯胸像が贈呈された。10時30分からは「黒崎義介画伯生誕100年記念：童画の里まちづくり事業」の一環として募集された「童画・児童画展」の入賞者の表彰がおこなわれ、11時からいよいよ待たれた学習院大学講師=高野 修先生による「黒崎義介の世界」の記念講演がなされた。

高野先生は講演の冒頭「黒崎画伯との出会いは42年前、28歳のときであり、画伯の人柄を親って『自分は先生の息子』と名乗る者が多いなかで、自分もそのうち一人である、と画伯への熱い思いを吐露された。「先生（黒崎画伯：以下略）は元々日本画家としてスタートした童画家である。自分としては今回が平戸ではじめての展覧会であるということが不思議であるが、今回ほど素晴らしく、作品が網羅的に集められたのははじめてである。このことを画伯の霊前に報告できることは大きな喜びである。また先生は画家としてだけではなく、歌詠み、茶人等として多方面に才能を発揮された。今日は「童画の里まちづくり」事業の一環として童画家としての先生の話をするが、それだけではないということを初めに言っておきたい」平戸町に醤油醸造業の六男として生まれた画伯が、大正15年に上京し川端画学校に入学するも抜群の成績だったにもかかわらず、8ヶ月で辞めてしまう。のちにそこで指導を受けた小茂田青樹の杉立社の知遇を得、昭和2年第8回中央美術展に「鞠つき」が初入選する等、画伯の画歴を紹介された。またこのような経緯を紹介したのは、画伯が生涯日本画の画家であったということを理解して頂くためである。画伯が高野氏に「私は童画の道を選んで今日まで来たが、年1回大作を制作したくなるんだよ。やはり日本画を制作するということは、新たな童画を描く原動力になっているように思われる」と話されたことがあると述べられた。文学における童話があるように絵画における童話があつてよいとも。この展覧会の準備のために平戸に何泊かして海をながめたが、私にはももたろう

に描かれている青海波は平戸の海だと思った。

高野先生は「私の専門は一遍上人の研究であるが、その仏教研究者の観点からみると先生の童画にはウソがない。源氏物語の模写を代表されるように、時代考証をたえずしっかりしていられる。そして最後に、その画業の集大成を生涯心から離れることがなかった郷里平戸で開催されたことを一番喜ばれているのは先生ではなかろうか。また日本画家黒崎義介の童画家としての鮮やかな八面六臂の作品が一堂に会した展覧として尽きない魅力を味わえるだろうと講演を結ばれた。

講演後、展覧会場に入ると、黒崎画伯の平戸での幼・少年時代の写真が貼られ、本家に残されていた手紙等が展示されている。

なかでも生前の画伯を知る人が一様に驚かっていたのは、20歳で上京された際撮られた写真である。まことにハンサムで往年のモーリス・シュバリエを彷彿とさせられた。出品作品 122 点。雑誌、絵本、色紙、デッサン、日本画、水彩画、童画等多岐にわたる出品作品 122 点。まさに黒崎義介画伯の集大成である。

2 時には平戸を出発しないとその日のうちに帰宅できないので、後ろ髪を引かれる思いで会場を後にした。

1952（昭和 27）年、藤沢市鵠沼海岸に転居されてからの後半生、黒崎画伯のご活躍は目を見張るものがある。童画研究会主宰、幼児教育研究所の設立、藤沢市民美術会の設立、鵠沼公民館での児童へのご指導等、エネルギッシュにご活躍され、1984 年（昭和 59 年）8 月 12 日、藤沢市民病院で脳梗塞のため 79 歳で亡くなられるまで 32 年間つづけられた。画伯亡き後、西山栄一氏を会長に画伯作品保存会が設立され、作品の多くが大切に守られてきた。

今年 8 月、藤沢でも市主催の展示がなされるという。9 月発行の秋号の『鵠沼』では間に合わないので、あえて渡部編集長（長男真宏氏と同級生）にお願いしてこの拙文を掲載させていただいた。

藤沢市にも記念館、もしくは美術館が建てられ、作品が安心して保管、展示されることを願って筆を置く。

なお、作品保存会会長の西山英一氏には取材にご協力していただき、そのうえ、高野 修氏のご著書『黒崎義介・絵と生涯』をご寄贈いただきました。末筆ながら、感謝申し上げます。

（あさの ようこ）

参考資料 『黒崎義介・絵と生涯』高野 修著 1988.8 よし介福祉基金

平戸文化センター黒崎義介展パンフレット 市川勝典企画編集

「従弟の大学入学祝いを買いたいんだ」という、知り合って間もない夫とデパートに行ったのは私が大学2年の春でした。万年筆を売り場のガラスケースの中から出してもらっては手に取って真剣に選んでいる彼の横で「仲の良い従弟がいるんだ……。」と私は喬さんを知ることになりました。しかし大学生の喬さんの印象は私の中にはなく、大学を卒業して大阪で就職しましたのでますます疎遠になりました。

叔父が亡くなって喬さんは大阪から帰ってきました。平成8年のことです。若くて現役を退いた喬さんは、たっぷりの時間を急に持ち合わせて、少しその時間を手持ちぶたさにしているように私には映り、『鵠沼』を何冊か持って、語る会に誘ってみることにしました。

「無理かもしれないなあ。ついこの間まで現役バリバリだったひとが地域史のサークルなんて……。」と半ばあきらめ気分で「鵠沼を語る会」のことを話したのを覚えています。ところがうれしいことに喬さんのやわらかな感性は、すんなりと次回から参加することを承知してくれたのです。それからの活躍ぶりはみなさまの方がよくご存知だと思います。

最近是我が仕事の関係で出席できなくて、会員としてのつき合いは薄くなっておりましたが、逆に親戚つき合いの方は濃くなっておりました。

一昨年の我家を改築している間は毎週水曜日は松岡でお風呂に入り、夕食をいただきました。喬さんの得意料理、生レバーの炒めものやゴーヤチャンプルーをご馳走になりました。また、松岡家と我家の墓が横浜の日野墓地にあり、月1度の墓参りを欠かさなかった叔母と喬さんの車に時折、便乗させてもらいました。その折々の喬さんとの会話は多岐にわたり、私が話題の断片を提供すると縦横に話が広がるというのが通例でした。硬柔を問わず驚くほどに博識でした。

いま、私の部屋にカクテルグラスにやわらかなももいろの繊細なさくら貝が、ワイングラスには波に洗われた海色のガラスの破片が喬さんの忘れ形見としてあります。朝陽のなかをゆったりと海辺を散策する喬さんの姿が浮かびます。

喬さんが亡くなって1週間後、2月19日が命日の夫の墓参りに行きました。これからは、喬さんのお墓参りをするのだと思うと悲しみが込み上げてきます。

(のぐち ゆくえ)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成 16 年 10 月～平成 17 年 3 月)

総務委員会

運営委員会 9 月 28 日(火) 12 名出席

平成 16 年 10 月例会 10 月 12 日(火) 10 時～12 時 25 名出席

例会に先立って、去る 10 月 6 日に急逝された鈴木武夫会員の黙祷を捧げた。

議題 1. サークル交歓会報告—23 日、24 日に行われる公民館まつりの駐車場整理係、パネル撤去係について担当を決めた。(佐藤)

2. 公民館まつりの準備について—企画部中心に展示準備のスケジュールと、作業協力者、まつり両日の午前、午後の当番を決めた。

3. 会誌「鵠沼 89 号」、特別付録「高瀬家関係年表、系図」配布について—出席会員に渡し、他は配布表によって担当者に依頼した。(中島)

4. 会誌「90 号」「91 号」編集予定について—創立 30 周年記年号にしたいとの話があった。(渡部)

お話—伊藤会員より、「会誌 89 号」に記載されている「高瀬弥一と大正教養派」について話があった。

運営委員会 10 月 27 日(火) 11 名出席

平成 16 年 11 月例会 11 月 9 日(火) 10 時～12 時 26 名出席

議題 1. 公民館まつりについて—23、24 日共に好天に恵まれて来場者も多く好評であったとの報告あり。ビデオ放映に持田玉枝さんからナレーションをつけてもらい非常に良かった。(内藤)

2. 平成 17 年 1 月例会、新年会について—昨年と同じく、鵠沼海岸 3 丁目のアコレードで 1 月 18 日(火)行う、出席希望者は来月会費 3000 円を徴収するとの話があった。(竹内)

3. 「鵠沼を語る会」創立 30 周年記念事業について—来年は創立 30 年の記念すべき年なので、記念行事をやりたい。まず、プロジェクトチーム作って何をやるかを検討したいとの提案があり、了承された。(有田)

4. その他—小林政夫会員が、秋の叙勲で瑞宝双光章を受賞された。(有田)

辻堂茂兵衛資料館見学—例月のお話の代わりに、竹内会員の紹介で、辻堂元町にある、名主石井家所蔵の古い民具や古文書を見学した。23 名参加。

運営委員会 11 月 30 日(火) 10 名出席

平成 16 年 12 月例会 12 月 14 日(火) 10 時～12 時 30 名出席

議題 1. サークル交歓会報告—公民館まつりの反省と、来年 6 月より各サークルが公民館を使用する際所定の使用料を納めることとなったことが報告された。(中島)

2. 旧東屋海浜出口門柱について—旧東屋海浜出口跡に唯一残っている門柱が、隣地の旧服部邸開発に伴い壊されそうであり、「鵠沼を語る会」と「鵠沼の緑と景観を守る会」が連名で、市長宛に保存するよう要望書を 12 月 8 日に提出したことを報告し了承された。(中島)

3. 鵠沼を語る会創立 30 周年記念事業プロジェクトチームについて—メンバーを、有田、岡田、佐藤、杉本、竹内、内藤、中島、松岡、渡部とすると発表された。(有田)

4. 平成 17 年 1 月例会、新年会について—1 月 18 日(火)喫茶店アコレードで 11 時 30 分より例会、12 時より新年会を行うと発表された。出席会員の中で参加希望者から会費 3000 円を徴収した。(中島)

お話—鵠沼に生まれ育った「植文」の娘さん大出サキさんより、「昔の天金通りの街並みとエピソード」について話があった。

運営委員会 12 月 21 日(火) 12 名出席

平成 17 年 1 月例会 1 月 18 日(火) 11:30~12:00 34 名出席 於アコレード

議題 1. 旧東屋海浜出口門柱について—門柱が開発中の隣接する旧服部邸に 25cm ほどかかっているため、保存するにはその部分を削るか、その分だけ移動するかであり、現在検討中と報告があった。(中島)

2. その他—(1)例会冒頭に小林会員により、叙勲受賞に際して当会から祝い品を贈られたことへのお礼の言葉があった。

(2)高木邸について、今月 28 日に第二回の検討委員会があり、高木邸の現状を確認することになったと報告された。(有田)

(3)2 月 15 日より 5 月 15 日まで、鵠沼郷土資料展示室にて、「鵠沼の歴史をひもとくパートⅢ、藤沢駅南口周辺のうつりかわり、なつかしき学び舎—鵠沼小学校」を展示すると報告があった。(中島)

新年会—例会終了後新年会が、33 名出席して行われた。ユーモアたっぷりの自己紹介や楽しいビンゴゲーム等で盛り上がり、和気あいあいのうちにお開きとなった。

運営委員会 1 月 25 日(火) 11 名出席

平成 17 年 2 月例会 2 月 8 日(火) 10 時~12 時 23 名出席

議題 1. 旧東屋海浜出口門柱について—1 月末に建築の専門家である岡田会員と、市職員と共に現地の確認をしたが、削ることは石が老朽化しているの

で難しく、移動することもすぐ横を上水道管が敷設されているので無理で、結局、撤去やむなしということになり、替わりに跡地に説明版を設置することになったと報告があり了承された。(有田)

2. 会誌「鶴沼」90号について—3月末発行の会誌90号の編集方針について報告があった。(渡部)

3. 会誌「鶴沼」復刻版について—30周年記念事業として既に決定されている復刻版について、まず、1号～30号を完成するよう伊藤、岡田、鈴木会員と共に進めていると報告があった。(杉本)

お話—石上に生まれ育った宮沢会員より、「石上周辺のうつりかわり」について話があった。

運営委員会 2月22日(火) 12名出席

平成17年3月例会 3月8日(火) 10～12時 33名(見学2名)

例会に先立って、2月13日(日)に亡くなられた松岡会員のご冥福を祈り全員で黙祷を捧げた。

議題1. 東屋海浜出口門柱、石畳について—門柱は2月24日に撤去されたが、工事業者の協力によって石を丁寧にはがしてセンター裏庭に平積み保存された。(2月13日読売新聞朝刊に報ぜられた) なお、唯一残っている遺構の石畳は是非現状保存するよう、「緑の会」と連名で3月3日市長宛要望書提出したと報告があり了承された。(中島)

2. 創立30周年記念事業プロジェクトチームについて—1月25日、2月22日会合を開き10項目の素案を決めた。それを出席会員に発表し実行委員会に参加を呼びかけ、3月22日(火)に第一回の会合を行うので参加されるよう要請した。(中島)

3. ホームページ委員会について—主として担当された松岡さんが死去されたため、新たに委員を増やし新たなサーバーで松岡さんの遺志を継いで引き続きホームページを開くことにした。(杉本)

4. 会誌「90号」について—死去された松岡さんの追悼文を加え、印刷、製本は3月30日に行うと会員の作業参加を呼びかけた。(渡部)

5. その他—去る2月13日(日)に会の活動に幅広く活躍された、松岡喬会員が亡くなられました。葬儀には会として生花をご霊前にお供えし、多くの会員が別れを惜しみました。ここに、生前、会の活動に多大な貢献をされたことに感謝するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

お話—故高木和夫さんの実弟高木正夫さんより、「昭和10年前後の鶴沼の想い出」について話があった。

編集後記

- * 前号の編集後記の冒頭に、元会長高木和男氏夫妻の訃報について記しました。その中で夫人は夫君が聖テレジア病院に入院した直後、自宅で倒れられたと書きましたが、順序が逆でした。すなわち、夫人の死の後に、その死を知らされぬまま、高木氏は入院されたのです。
- * 前号の巻頭に、元会長高木和男氏夫妻の追悼文を掲載しましたが、今度はその執筆者の一人、松岡 喬氏が他界されました。
- * その2週間ほど前、彼から電話があり、「また、入院しなければならなくなったので、90号に書く予定だった『海岸漂流物』は92号に回してください。91号は戦争特集でしたよね。」とのことでした。
- * 追悼文をどなたにお願いするかを考えた時、真っ先に思い浮かんだのが野口ゆくえさんでした。「身内だから」と固辞されるのを、「彼を最もよく知っているのは貴女だから」と、無理にお願いしました。
- * さて、前号では『鵠沼と高瀬家の百年』という特集を組んでは見たものの、前半の五十年間だけしか採りあげることができませんでした。三郎氏が出された画文集に、後半の五十年について過不足なく述べられた文を見つけ、再録をお願いして、ご快諾を得ました。感謝します。
- * 今号では、鵠沼地区の東西両端に建つ巨大な記念碑を採り上げ、さらに鵠沼きっての古刹=万福寺を紹介することができました。
- * 新しい試みとして、例会の「お話」の中から、鵠沼で生まれて住み続けてこられた4人の方々を選んでまとめました。テープ起こしから、編集・レイアウトまで竹内広弥企画委員が引き受けてくださいました。大変なご労苦だったと思います。記して深く感謝申し上げます。
- * また、城 夏子、黒崎義介という鵠沼ゆかりの人々を紹介することができました。
- * 1975年に、鵠沼海岸駅前に店を構える番場定八氏・福地誠一氏らが、鵠沼について語り合おうと発足した「鵠沼を語る会」。すでに初代の方々はこの世になく、30年という時が流れました。2005年度は30周年という区切りの年を迎え、さまざまなイベントが企画されています。会誌『鵠沼』も2度にわたる特集を組む予定です。 (渡部)

『鵠沼』 第90号
平成17年 3 月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002